



## **Cisco Prime Central for Hosted Collaboration Solution Assurance インストレーション ガイド**

リリース 1.0.1

**【注意】シスコ製品をご使用になる前に、安全上の注意**  
([www.cisco.com/jp/go/safety\\_warning/](http://www.cisco.com/jp/go/safety_warning/))をご確認ください。

本書は、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。  
あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。

また、契約等の記述については、弊社販売パートナー、または、弊社担当者にご確認ください。

このマニュアルに記載されている仕様および製品に関する情報は、予告なしに変更されることがあります。このマニュアルに記載されている表現、情報、および推奨事項は、すべて正確であると考えていますが、明示的であれ黙示的であれ、一切の保証の責任を負わないものとします。このマニュアルに記載されている製品の使用は、すべてユーザ側の責任になります。

対象製品のソフトウェア ライセンスおよび限定保証は、製品に添付された『Information Packet』に記載されています。添付されていない場合には、代理店にご連絡ください。

The Cisco implementation of TCP header compression is an adaptation of a program developed by the University of California, Berkeley (UCB) as part of UCB's public domain version of the UNIX operating system. All rights reserved. Copyright © 1981, Regents of the University of California.

ここに記載されている他のいかなる保証にもよらず、各社のすべてのマニュアルおよびソフトウェアは、障害も含めて「現状のまま」として提供されます。シスコおよびこれら各社は、商品性の保証、特定目的への準拠の保証、および権利を侵害しないことに関する保証、あるいは取引過程、使用、取引慣行によって発生する保証をはじめとする、明示されたまたは黙示された一切の保証の責任を負わないものとします。

いかなる場合においても、シスコおよびその供給者は、このマニュアルの使用または使用できないことによって発生する利益の損失やデータの損傷をはじめとする、間接的、派生的、偶発的、あるいは特殊な損害について、あらゆる可能性がシスコまたはその供給者に知られていても、それらに対する責任を一切負わないものとします。

Cisco and the Cisco logo are trademarks or registered trademarks of Cisco and/or its affiliates in the U.S. and other countries. To view a list of Cisco trademarks, go to this URL: [www.cisco.com/go/trademarks](http://www.cisco.com/go/trademarks). Third-party trademarks mentioned are the property of their respective owners. The use of the word partner does not imply a partnership relationship between Cisco and any other company. (1110R)

このマニュアルで使用している IP アドレスは、実際のアドレスを示すものではありません。マニュアル内の例、コマンド出力、および図は、説明のみを目的として使用されています。説明の中に実際のアドレスが使用されていたとしても、それは意図的なものではなく、偶然の一致によるものです。

*Cisco Prime Central for Hosted Collaboration Solution Assurance* インストールガイド 1.0.1  
Copyright © 2012 Cisco Systems, Inc. All rights reserved.



## CONTENTS

### はじめに v

新機能および変更された機能に関する情報 v

目標 v

対象読者 v

表記法 vi

製品マニュアル vii

マニュアルの入手方法およびテクニカル サポート vii

---

### CHAPTER 1

#### 概要 1-1

---

### CHAPTER 2

#### Prime Central for HCS のインストール、アップグレード、およびアンインストール 2-1

Prime Central for HCS のサーバ要件 2-3

Prime Central for HCS のクライアント要件 2-4

Prime Central for HCS のデフォルト ポート 2-4

Prime Central for HCS のデフォルト ポート 2-4

ドメイン マネージャのデフォルト ポート 2-5

Prime Central for HCS をインストールする前に 2-5

仮想マシンのメモリの更新 2-5

vCenter 証明書の取得 2-6

VM での適切な日付の設定 2-6

ホスト名とドメイン名の設定 2-7

必要な RPM のダウンロード 2-9

インストーラ コードおよびメディアの設定 2-9

SDR クレデンシャルの取得 2-10

Prime Central for HCS のインストールおよび起動 2-10

リモートでステージングしたファイルの使用 2-11

ローカルでステージングしたファイルのターゲット インストール マシンでの使用 2-17

Prime Central for HCS 1.0 からのアップグレード 2-22

リモートでステージングしたファイルの使用 2-23

ローカルでステージングしたファイルのターゲット インストール マシンでの使用 2-28

失敗したアップグレード手順からの回復 2-33

Prime Central for HCS のインストール後 2-33

Infrastructure Monitoring : エージェントレス設定 2-33

- 付加的なインストール後のタスクの実行 2-34
  - Windows 2008 および Linux Server での SNMP のイネーブル化 2-35
- Prime Central for HCS のアンインストール 2-36
- データのバックアップと復元 2-37
  - データをバックアップする前に 2-37
  - データのバックアップ 2-39
  - データを復元する前に 2-40
  - バックアップしたデータの復元 2-41
- 新規 Linux マシンでの正確な日付の設定 A-1
- ファイアウォールの永続的な無効化 A-1
- Linux ファイアウォールの有効化 A-2
- パスワードの変更 A-2
- Red Hat ベース システムでの永続的なホスト名の変更 A-2
- コマンドラインを使用したスタティック IP アドレスの設定 A-2
- DNS の設定 A-3

---

GLOSSARY

---

INDEX



## はじめに

ここでは、このマニュアルの目的と対象読者を説明します。このマニュアルでは、次の表記法を使用して説明および情報を表示しています。

## 新機能および変更された機能に関する情報

次の表に、『Cisco Prime Central for HCS 1.0.1 Installation Guide』が最後にオンラインで公開されてから追加または変更された情報を示します。

表 1 このマニュアルの新しい情報と変更された情報

リリース日	リビジョン	参照先
2012年8月30日	netrc ファイルで Service Visualizer ログインに関連付けられたユーザが変更されました。netrc ファイルは、バックアップおよび復元プロセスで使用されます。以前は、netcool と記されていました。現在、root として指定されています。	<a href="#">「データをバックアップする前に」(P.37)</a> <a href="#">「データを復元する前に」(P.40)</a>
2012年8月16日	最初のバージョン	—

## 目標

このマニュアルでは、Prime Central for Cisco Hosted Collaboration Solution のインストールとアンインストールの手順を示します。

## 対象読者

このマニュアルの主な対象読者には、ネットワーク オペレーションの担当者とシステム管理者が含まれます。このマニュアルは、次の製品およびトピックに関する知識があることを前提としています。

- 基本的なインターネットワーキングの用語および概念
- Red Hat Enterprise Linux
- Oracle データベース管理

## 表記法

このマニュアルでは、次の表記法を使用しています。

項目	表記法
コマンドおよびキーワード	太字
セッション情報およびシステム情報の表示出力	screen フォント
ユーザが入力しなければならない情報	太字の screen フォント
ユーザが指定しなければならない変数	イタリック体の screen フォント
メニュー項目の選択	[Option] > [Network Preferences]



**注意**

「**要注意**」の意味です。機器の損傷またはデータ損失を予防するための注意事項が記述されています。



**(注)**

「**注釈**」です。役立つ情報やこのマニュアルに記載されていない参照資料を紹介しています。



**ワンポイントアドバイス**

時間を節約する方法です。ここに紹介している方法で作業を行うと、時間を短縮できます。



**ヒント**

「**問題解決に役立つ情報**」です。

## 製品マニュアル

表 1 に、Prime Central for HCS マニュアルセットを示します。

元のドキュメントの発行後に、ドキュメントを更新することがあります。マニュアルのアップデートについては、Cisco.com で確認してください。最新の Prime Central for HCS マニュアルを参照するには、表 1 のリンクにアクセスする必要があります。

表 2 関連資料

ドキュメント名	ご利用形式
『User Guide for Prime Central for Cisco Hosted Collaboration Solution 1.0.1』	Cisco.com : <a href="http://www.cisco.com/en/US/products/ps12491/products_user_guide_list.html">http://www.cisco.com/en/US/products/ps12491/products_user_guide_list.html</a>
『Prime Central for Cisco Hosted Collaboration Solution インストールガイド 1.0.1』 (このマニュアル)	Cisco.com : <a href="http://www.cisco.com/en/US/products/ps12491/prod_installation_guides_list.html">http://www.cisco.com/en/US/products/ps12491/prod_installation_guides_list.html</a>
『Programmer's Guide for Prime Central for Cisco Hosted Collaboration Solution 1.0.1』	Cisco.com に掲載 <a href="http://www.cisco.com/en/US/products/ps12491/prod_technical_reference_list.html">http://www.cisco.com/en/US/products/ps12491/prod_technical_reference_list.html</a>
『Release Notes for Prime Central for Cisco Hosted Collaboration Solution 1.0.1』	Cisco.com : <a href="http://www.cisco.com/en/US/products/ps12491/prod_release_notes_list.html">http://www.cisco.com/en/US/products/ps12491/prod_release_notes_list.html</a>
『Open Source Used In Prime Central for Cisco Hosted Collaboration Solution 1.0.1』	Cisco.com : <a href="http://www.cisco.com/en/US/products/ps12491/products_licensing_information_listing.html">http://www.cisco.com/en/US/products/ps12491/products_licensing_information_listing.html</a>

## マニュアルの入手方法およびテクニカル サポート

マニュアルの入手方法、テクニカル サポート、その他の有用な情報について、次の URL で、毎月更新される『What's New in Cisco Product Documentation』を参照してください。シスコの新規および改訂版の技術マニュアルの一覧も示されています。

<http://www.cisco.com/en/US/docs/general/whatsnew/whatsnew.html>

『What's New in Cisco Product Documentation』は RSS フィードとして購読できます。また、リーダーアプリケーションを使用してコンテンツがデスクトップに直接配信されるように設定することもできます。RSS フィードは無料のサービスです。シスコは現在、RSS バージョン 2.0 をサポートしています。







# CHAPTER 1

## 概要

このマニュアルでは、Prime Central for HCS のインストール、アップグレード、およびアンインストールの方法を説明します。この章では、Prime Central for HCS ソフトウェアについて説明します。



(注)

Prime Central for HCS は、以前、Hosted Collaboration Mediation として知られていました。現在、HCM 1.2 ソフトウェアを Prime Central for HCS 1.0.1 にアップグレードするオプションはありません。[「Prime Central for HCS のインストール、アップグレード、およびアンインストール」\(P.2-1\)](#) の章で概説する手順に従って、フレッシュ インストールを実行する必要があります。Cisco Hosted Collaboration Solution (HCS) 8.6.2 を HCS 9.0.1 にアップグレードするには、『*Cisco Hosted Collaboration Solution 8.6.2*』マニュアルを参照してください。

Prime Central for HCS は、管理対象サービス プロバイダー (MSP) のネットワーク オペレーション センター (NOC) で使用することを目的としています。Prime Central for HCS のメイン コンポーネントは、Service Assurance と呼ばれます。Prime Central for HCS は、ホストされる環境の保証データを単一ペインに表示し、各種の概要やレポートを提供します。Prime Central for HCS は、仮想化環境において、次に示すドメイン マネージャのカスタマー固有の実装間でブリッジの役割を果たします。

- Cisco Unified Operations Manager (CUOM)
- Infrastructure Monitoring
- Cisco Unified Computing System Manager (UCSM)
- Data Center Network Manager (DCNM) : SAN
- Data Center Network Manager (DCNM) : LAN

Prime Central for HCS は、これらのドメイン マネージャの複数のインスタンスからデータを集約して、Prime Central for HCS にログインしているユーザが、集約されたカスタマー データを 1 つのウィンドウに表示できるようにします。Prime Central for HCS は、1 組の管理およびダッシュボード ポートレットで構成されています。

ダッシュボード ポートレットを使用すると、CUOM、Infrastructure Monitoring、UCSM、DCNM-SAN、および DCNM-LAN の各仮想化インスタンスからデータを集約できます。

Prime Central for HCS は、サービス保証管理プラットフォームとして、次の主要機能を備えています。

- スケーラブルで拡張可能な高性能プラットフォーム。
- UCS プラットフォームですべてのコンポーネントを仮想化方式により展開可能。
- プラットフォームにノースバウンド インターフェイスを搭載。

Prime Central for HCS は、ドメイン マネージャから生成されたイベントを表示するためのサービス プロバイダーのダッシュボードをサポートしています。[「Prime Central for HCS のインストール、アップグレード、およびアンインストール」\(P.2-1\)](#) で次の項目を参照してください。

- 「Prime Central for HCS のサーバ要件」 (P.2-3)
- 「Prime Central for HCS のクライアント要件」 (P.2-4)
- 「Prime Central for HCS のデフォルト ポート」 (P.2-4)
- 「Prime Central for HCS をインストールする前に」 (P.2-5)
- 「Prime Central for HCS のインストールおよび起動」 (P.2-10)
- 「Prime Central for HCS のインストール後」 (P.2-33)
- 「Prime Central for HCS のアンインストール」 (P.2-36)



## CHAPTER 2

# Prime Central for HCS のインストール、アップグレード、およびアンインストール

この章では、Prime Central for HCS 1.0.1 のインストール、アップグレード、およびアンインストールの方法を説明します。Prime Central for HCS のインストールは CLI ベースです。Prime Central は、Shared Data Repository (SDR) と呼ばれる外部データベースとの接続を確立します。SDR からのデータは、イベントの強化、原因分析、およびサービスへの影響分析に使用されます。SDR がインストールされている仮想マシン (VM) は、HCM-Fulfillment です。

インストール手順を成功させるには、次の 5 つのインストーラを記載されている順序で実行することが重要です。

1. Prime Central
2. Event Collector
3. Correlation Engine
4. Service Visualizer
5. Infrastructure Monitoring

この章の内容は、次のとおりです。

- 「Prime Central for HCS のサーバ要件」 (P.2-3)
- 「Prime Central for HCS のクライアント要件」 (P.2-4)
- 「Prime Central for HCS のデフォルト ポート」 (P.2-4)
- 「Prime Central for HCS をインストールする前に」 (P.2-5)
- 「Prime Central for HCS のインストールおよび起動」 (P.2-10)
- 「Prime Central for HCS 1.0 からのアップグレード」 (P.2-22)
- 「Prime Central for HCS のインストール後」 (P.2-33)
- 「付加的なインストール後のタスクの実行」 (P.2-34)
- 「Prime Central for HCS のアンインストール」 (P.2-36)
- 「データのバックアップと復元」 (P.2-37)

Prime Central for HCS をインストールするには、1つのコンポーネントに1台ずつ、計5台の仮想マシン（VM）が必要です。次の表では、インストールプロセスでインストールされるコンポーネントについて説明します。また、ハードウェア要件についても概説します。


表 2-1 ハードウェア要件

VM ロール	製品	RAM	ディスク	CPU
Prime Central	Prime Central	16 GB	120 GB+ RAM サイズ（スワップ用）	4
Event Collector	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Event Collector 7.3.1</li> <li>• SNMP Probe v11.0.0</li> <li>• EIF Probe v10.0.10</li> <li>• ODBC ゲートウェイ</li> <li>• SNMP ゲートウェイ</li> <li>• Prime Central インストーラ</li> <li>• NcKL 3.2</li> </ul>	4 GB	120 GB+ RAM サイズ（スワップ用）	4
Service Visualizer	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Service Visualizer 4.2.1 FP2</li> <li>• WebGUI/Dashboard 7.3.0 FP4</li> </ul>	8GB	120 GB+ RAM サイズ（スワップ用）	4
Infrastructure Monitoring	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Infrastructure Monitoring 6.2.2 (TEM/TEPS) FP5</li> <li>• DB2 9.5.1</li> </ul>	4 GB	120 GB+ RAM サイズ（スワップ用）	4
Correlation Engine	Correlation Engine 5.1.1 FP1	4 GB	120 GB+ RAM サイズ（スワップ用）	2

# Prime Central for HCS のサーバ要件

表 2-2 に、Prime Central for HCS コンポーネントのサーバ要件を示します。

表 2-2 Prime Central for HCS のサーバ要件

要件	Notes
オペレーティング システム	<p>Red Hat Enterprise Linux 5.5 (64 ビット)</p> <p>デフォルトでは、RHEL 5.5 に必要な RPM がインストール メディアに付属しています。ただし、yum コマンド オプションを使用する場合は、Red Hat サイトに登録する必要があります。yum インストール コマンドを使用するには、Red Hat のミラーに接続してパッケージを Linux にインストールできる必要があります。登録することで、セキュリティ アップデートを受信できるため、OS へのダメージを防止できます。RHEL インストールを Red Hat サーバに登録することを推奨します。手順については、<a href="http://docs.redhat.com/docs/en-US/Red_Hat_Network_Satellite/5.3/html/Reference_Guide/ch-register.html">http://docs.redhat.com/docs/en-US/Red_Hat_Network_Satellite/5.3/html/Reference_Guide/ch-register.html</a> を参照してください。</p> <p> (注) Python 2.4 は RHEL 5.5 に付属しています。</p> <p>yum、rpm、またはその他のメソッドを使用して、RHEL 5.5 でソフトウェアをインストールしたり、既存のソフトウェアを更新したりしないでください。ただし、インストールの完了後は、OS アップデートやセキュリティ パッチをインストールすることができます。</p>
ドメイン マネージャ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• CUOM 8.6 MSP</li> <li>• UCSM 1.4</li> <li>• DCNM-LAN 5.2</li> <li>• DCNM-SAN 5.2</li> <li>• Infrastructure Monitoring</li> </ul>

## Prime Central for HCS のクライアント要件

次に、Prime Central for HCS を表示するためのクライアント要件を示します。

- Sun Java 1.6 update 30 以降を使用する Mozilla 3.6.23
- Sun Java 1.6 update 30 以降を使用する IE 8.0

バージョンが一致しないブラウザをインストールしていないことを確認してください。複数のブラウザバージョンを実行している場合は、サポートされていないブラウザバージョンをアンインストールします。

また、バージョンが一致しない JRE バージョンが同一システムにインストールされていないことも確認してください。複数の JRE がインストールされている場合は、次のことを行ってください。

- 上記以外の JRE をアンインストールすることを推奨します。
- その他の JRE をアンインストールしない場合は、JNLP およびアプレット起動用のデフォルトバージョンとして Sun Java 1.6 update 30 以降を設定してください。この設定を調整するには、Java Control Panel を使用します。

## Prime Central for HCS のデフォルト ポート

ここでは、Prime Central for HCS とドメイン マネージャのデフォルト ポートを示します。Prime Central for HCS がドメイン マネージャと通信できることを確認する必要があります。内容は次のとおりです。

- 「[Prime Central for HCS のデフォルト ポート](#)」 (P.2-4)
- 「[ドメイン マネージャのデフォルト ポート](#)」 (P.2-5)

## Prime Central for HCS のデフォルト ポート

表 2-3 に、Prime Central for HCS のデフォルト ポートを示します。デフォルト ポートはインストール時に変更できます。

表 2-3 Prime Central for HCS のデフォルト ポート

プロトコル	ポート番号
HTTP	8090
HTTPS	8443
HTTP	8080 : CUOM からの通知の受信用。
ODBC	3306

## ドメイン マネージャのデフォルト ポート

表 2-4 に、Shared Database Repository とドメイン マネージャのデフォルト ポートを示します。

表 2-4 ドメイン マネージャのデフォルト ポート

認証およびドメイン マネージャ	プロトコル	ポート番号
<b>認証</b>		
Shared Database Repository	HTTP	8443
<b>ドメイン マネージャ</b>		
CUOM	NBI	44442
CUOM (相互起動)	HTTP	1741
	HTTPS	443
DCNM-LAN	HTTP	8080
DCNM-SAN	HTTP	80
UCSM	HTTP	80
Infrastructure Monitoring	HTTPS	443

## Prime Central for HCS をインストールする前に

このインストール プロセスには、Python 2.4 以降が必要です。RHEL 5.5 にはデフォルトで、Python 2.4 が付属しています。

インストールを始める前に、次の設定が必要です。

1. 「仮想マシンのメモリの更新」 (P.2-5)
2. 「vCenter 証明書の取得」 (P.2-6)
3. 「VM での適切な日付の設定」 (P.2-6)
4. 「ホスト名とドメイン名の設定」 (P.2-7)
5. 「必要な RPM のダウンロード」 (P.2-9)
6. 「インストーラ コードおよびメディアの設定」 (P.2-9)
7. 「SDR クレデンシャルの取得」 (P.2-10)

### 仮想マシンのメモリの更新

Prime Central for HCS 1.0.1 には、16 GB の RAM 要件があります。仮想マシンのメモリを更新するには、次の手順に従ってください。

- 
- ステップ 1** 更新するメモリが割り当てられた VM の電源を切ります。
  - ステップ 2** 仮想マシンを管理している vSphere クライアントに接続します。
  - ステップ 3** 仮想マシンのエントリーを右クリックし、[Edit Settings] > [Hardware] > [Memory] に移動します。
  - ステップ 4** 右側に表示されるウィンドウで、メモリ サイズを増やします。

ステップ 5 VM の電源を入れます。

## vCenter 証明書の取得

Prime Central for HCS を使用するには、VMware の仮想マシン管理ソフトウェアである vCenter 4.1 がインストールされ、実行されていることが必要です。Infrastructure Monitoring インストーラには、vCenter ホスト名または IP アドレス、ユーザ名、パスワード、および証明書が必要です。vCenter サーバから証明書をエクスポートするツールとして、Mozilla Firefox を使用してください。Firefox で証明書を取得するには、次の手順に従ってください。

- ステップ 1 ホストにアクセスできるマシン上のブラウザで、<https://<vcenter-hostname>> に移動します。
- ステップ 2 ページを右クリックし、[View Page Info] をクリックします。
- ステップ 3 [Security] タブをクリックし、[View Certificate] をクリックします。
- ステップ 4 [Details] タブをクリックし、[Export] をクリックします。
- ステップ 5 名前を **rui.crt** に変更し、[Directory] を選択します。
- ステップ 6 [Save] をクリックします。
- ステップ 7 インストーラ スクリプトが配置されているメディア マシンに、rui.crt ファイルを移動します。

## VM での適切な日付の設定

インストールする前に、すべてのマシンに日付と時刻を設定します。すべての VM の日付は、NTP を使用して同期化する必要があります。date コマンドを実行することによって、仮想マシンに設定された日付と時刻をチェックできます。

新規の Linux マシンでの時刻設定の詳細については、付録 A 「新規 Linux マシンでの正確な日付の設定」を参照してください。



(注) インストール後に、誤ったエントリを修正することはできません。日付を修正するには、再インストールする必要があります。

RHEL 5.5 64 ビット Linux VM に日付を設定するには、次の手順に従ってください。

- ステップ 1 VNC などのセッションのある端末から次のコマンドを実行します。Putty セッションは作用しないことに注意してください。

```
system-config-date
```
- ステップ 2 [Date & Time] タブで、正確な日付と時刻を設定します。
- ステップ 3 [Time Zone] タブで、正確な時間帯を設定します。
- ステップ 4 [Network Time Protocol] タブをクリックし、[Enable Network Time Protocol] チェックボックスと [Synchronize System Clock Before Starting Service] チェックボックスをオンにします。



**ステップ 5** [OK] ボタンをクリックします。サーバに接続し、時刻と日付が更新されます。

## ホスト名とドメイン名の設定

適切なホスト名とドメイン名がマシンに正確に設定されていることを確認します。ホスト名は、適切な IP アドレスに解決できることが必要です。

**ステップ 1** ホスト名を設定するには、`/etc/hosts` ファイルを編集し、*IP-Address hostname.domain-name hostname* 形式で設定します。

次に例を示します。

- ホスト名が `hostname123`
- ドメイン名が `cisco.com`
- IP アドレスが `1.1.1.1`

この場合、次のように詳細を設定します。

```
12.0.0.1 localhost.localdomain localhost
::1 localhost6.localdomain6 localhost6
1.1.1.1 hostname123.cisco.com hostname123
```



**ヒント** VM 上のインストールが起動できず、「?Hostname 'localhost' missing from '/etc/hosts' file.?」というエラーが表示される場合は、`/etc/hosts` ファイルに `localhost` エントリが欠落していることを示しています。ファイルに `localhost` エントリが存在するかどうかを確認してください。正確な `/etc/hosts` ファイルと誤りのある `/etc/hosts` ファイルは、それぞれ次のようになります。

正確なバージョン :

```
# Do not remove the following line, or various programs that require network functionality will fail.
```

```
12.0.0.1 localhost.localdomain localhost
::1 localhost6.localdomain6 localhost6
1.1.1.1 hcm-test.cisco.com hcm-test
```

誤りのあるバージョン :

```
# Do not remove the following line, or various programs that require network functionality will fail.
```

```
12.0.0.1 hcm-linux-staging localhost.localdomain localhost
::1 localhost6.localdomain6 localhost6
```

**ステップ 2** `/etc/resolv.conf` ファイルが DNS サーバ用に適切に設定されていることを確認します。たとえば、前述の例では次のようになります。

```
domain cisco.com
nameserver 1.1.1.1
```

**ステップ 3** ホスト名、完全修飾ドメイン名 (FQDN)、および IP アドレスがターゲット VM で完全に解決可能であることを確認します。

次の例を使用して、ホスト名が「hostname123」、ドメイン名が「cisco.com」、および IP アドレスが「1.1.1.1」であることを確認します。



(注)

`nslookup` は、DNS が設定されている場合のみ作用します。

```
[root@hostname123 ~]# hostname
hostname123
[root@hostname123 ~]# nslookup hostname123.cisco.com
Server:          1.1.1.1
Address:         1.1.1.1#53

Name:   hostname123.cisco.com
Address: 1.1.1.2

[root@hostname123 ~]# nslookup hostname123
Server:          1.1.1.1
Address:         1.1.1.1#53

Name:   hostname123.cisco.com
Address: 1.1.1.2

[root@hostname123 ~]# nslookup 1.1.1.2
Server:          1.1.1.1
Address:         1.1.1.1#53

130.10.16.172.in-addr.arpa      name = hostname123.cisco.com.

[root@hostname123 ~]# ping -c1 hostname123
PING hostname123.cisco.com (1.1.1.2) 56(84) bytes of data.
64 bytes from hostname123.cisco.com (1.1.1.2): icmp_seq=1 ttl=64 time=0.013 ms

--- hostname123.cisco.com ping statistics ---
1 packets transmitted, 1 received, 0% packet loss, time 0ms
rtt min/avg/max/mdev = 0.013/0.013/0.013/0.000 ms

[root@hostname123 ~]# ping -c1 hostname123.cisco.com
PING hostname123.cisco.com (1.1.1.2) 56(84) bytes of data.
64 bytes from hostname123.cisco.com (1.1.1.2): icmp_seq=1 ttl=64 time=0.011 ms

--- hostname123.cisco.com ping statistics ---
1 packets transmitted, 1 received, 0% packet loss, time 0ms
rtt min/avg/max/mdev = 0.011/0.011/0.011/0.000 ms

[root@hostname123 ~]# ping -c1 1.1.1.2
PING 1.1.1.2 (1.1.1.2) 56(84) bytes of data.
64 bytes from 1.1.1.2: icmp_seq=1 ttl=64 time=0.011 ms

--- 1.1.1.2 ping statistics ---
1 packets transmitted, 1 received, 0% packet loss, time 0ms
rtt min/avg/max/mdev = 0.011/0.011/0.011/0.000 ms
```

**ステップ 4** HOSTNAME 引数が `/etc/sysconfig/network` ファイルに適切に設定されていることを確認します。次に、ホスト名として「hostname123」およびゲートウェイとして「10.10.10.10」を使用した例を示します。

```
NETWORKING=yes
NETWORKING_IPV6=no
HOSTNAME=hostname123
GATEWAY=10.10.10.10
```

## 必要な RPM のダウンロード

デフォルトでは、RHEL 5.5 に必要な RPM がインストールメディアに付属しています。ただし、yum コマンド オプションを使用する場合は、Red Hat サイトに登録する必要があります。yum インストール コマンドを使用するには、Red Hat のミラーに接続してパッケージを Linux にインストールする必要があります。登録することで、セキュリティ アップデートを受信できるため、OS へのダメージを防止できます。VM を Red Hat サーバに登録することを推奨します。登録は、実稼働環境で行う必要があります。



(注)

Red Hat に登録する際に、ソフトウェアをアップグレードすることもできます。「kernel」アップグレードは選択しないでください。このオプションを選択すると、OS がバージョン 5.5 からバージョン 5.8 にアップグレードされます。

VM セットアップのいずれかの時点で yum を使用した場合は、インストール時にも同様に使用する必要があります。

登録の手順については、次の場所にある Red Hat サイトを参照してください。

[http://docs.redhat.com/docs/en-US/Red\\_Hat\\_Network\\_Satellite/5.3/html/Reference\\_Guide/ch-regi-ster.html](http://docs.redhat.com/docs/en-US/Red_Hat_Network_Satellite/5.3/html/Reference_Guide/ch-regi-ster.html)

プロキシ環境の場合は、次のサイトに示されているとおりにプロキシを設定します。

[http://www.softpanorama.org/Commercial\\_linuxes/RHEL/Registration/rhel5\\_registration.shtml](http://www.softpanorama.org/Commercial_linuxes/RHEL/Registration/rhel5_registration.shtml)

## インストーラ コードおよびメディアの設定

DVD に収録されたインストーラにアクセスします。または、CCO サイトからソフトウェアをダウンロードすることもできます。



(注)

インストーラをローカルサーバに移動し、そのサーバからインストールを開始することを推奨します。

インストーラにアクセスして実行できるようにするには、少なくとも 34 GB の空きディスク容量があるセントラルサーバが必要です。このサーバは、各種のインストーラをインストールするすべての仮想マシンに接続できる必要があります。このサーバに、すべてのファイルを配置するディレクトリを作成します。

サーバ上で次のコマンドを実行します。



注意

これによって、ディレクトリに存在する余分なファイルが削除されます。このディレクトリには、すべてのユーザに対する実行権限（たとえば、755 権限）があり、特定のユーザディレクトリ（たとえば、/root、/home、/users）ではないことが必要です。メディア用として推奨されるディレクトリの場所は /opt です。

**ステップ 1** root ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。

```
rsync --delete -rvL  
directory_that_contains_installer_files/ directory_to_place_installer_files/
```

## SDR クレデンシャルの取得

Shared Data Repository (SDR) バージョンは、HCM-Fulfillment リリース HCS 8.6.2 ES3 の一部です。SDR データベースを入力として使用して、イベントの強化、原因分析、およびサービスへの影響分析が実行されます。

SDR クレデンシャルを取得するには、次の手順に従ってください。各種コンポーネントのインストール時に、この手順を使用して取得した SDR クレデンシャルが使用されます。

ご使用のマシンから、SFTP 接続を確立して HCM-Fulfillment マシンに接続します。SDR クレデンシャルを含む `cdm_sa.env` ファイルにアクセスする必要があります。`get` コマンドは、SFTP 接続を開始したマシン上のディレクトリに、ファイルを配置します。

- 
- ステップ 1** root ユーザとして次のコマンドを使用して、HCM-F との接続を確立します。
- ```
sftp admin@hostname
```
- パスワードの入力を求められたら、`admin` パスワード (UI を介したログインに使用するパスワード) を入力します。
- ステップ 2** ディレクトリを SDR クライアントに変更します。
- ```
cd sdrclient/jdbc
```
- ステップ 3** `cdm_sa.env` ファイルのコピーを取得します。
- ```
get cdm_sa.env
```
- ステップ 4** SFTP セッションを終了します。
- ```
quit
```
- ステップ 5** 読み取り用にファイルを開くソフトウェアを使用して、`cdm_sa.env` を開きます。
- ステップ 6** `export APP_SA_UID` を検索します。結果に対して、「`export APP_SA_UID=<sdr_user>`」と表示されます。`<sdr_user>` 内の値は SDR のユーザ名です。
- ステップ 7** `export APP_SA_PWD` を検索します。結果に対して、「`export APP_SA_PWD=<sdr_encrypted_password>`」と表示されます。`<sdr_encrypted_password>` 内の値は SDR のパスワードです。
- 

SDR クレデンシャルを取得すると、Prime Central for HCS Assurance のインストールが可能になります。

## Prime Central for HCS のインストールおよび起動

Prime Central for HCS をインストールするには、このマニュアルに指定された順序に従い、5 台のマシンで 5 つのインストーラを実行する必要があります。環境内で以前に Prime Central for HCS 1.0 をインストールしたことがある場合には、フレッシュインストールかアップグレードのいずれかを実行できます。



### 注意

同じマシンに異なるインストーラをインストールしないでください。インストールを成功させるためには、インストールの順序が重要です。

次のいずれかの方法で、コンポーネントをインストールできます。コンポーネントごとに代替方法を使用できます。フィールドの入力に関するヘルプについては、`./prime_push.py --help` コマンドを使用できます。

- 「リモートでステージングしたファイルの使用」(P.2-11)：リモート仮想マシンとの SSH 接続を確立することによって、1 台のマシンからファイルをインストールできます。コンポーネントは、リモートマシンにインストールされます。
- 「ローカルでステージングしたファイルのターゲットインストールマシンでの使用」(P.2-17)：この方法では、ローカルマシンに直接コンポーネントがインストールされます。

## リモートでステージングしたファイルの使用

この方法を使用する場合は、インストールを開始するマシンから、リモートマシンへの SSH 接続を確立する必要があります。インストールを実行するたびにパスワードを入力しなければならない状況を回避するには、次に示す手順に従ってください。この手順は任意です。

### SSH エージェントの設定

SSH エージェントを設定することによって、インストールをプッシュするたびにパスワードの入力を求められることがなくなります。ただし、`--ssh-push-key` を使用する場合は、特定のマシンのユーザーアカウントから最初にログインするときに、ターゲットマシンの `root` パスワードを入力するように求められます。

スクリプトを実行するたびに SSH キーパスフレーズを入力しないで済むように、標準の Linux SSH 機能を使用し、`ssh-agent` を使用して事前に許可されたキーを保存することができます。

- ステップ 1** 最初の手順は、キーの生成です。キーがない場合は、`root` ユーザとしてログインし、キーを生成します。この操作は、設定をプッシュするターゲットマシンに対して 1 度だけ実行します。

```
test ~/.ssh/id_dsa || ssh-keygen -t dsa
test ~/.ssh/id_rsa || ssh-keygen -t rsa
```



(注) SSH キーのパスフレーズの設定は任意です。パスフレーズによって、安全性が高まると考えられます。

- ステップ 2** SSH エージェントを起動します。この手順は初回、またはプッシュする元マシンの再起動後にのみ適用します。

- ステップ 3** 次のコマンドを実行して、SSH エージェントが実行中であるかどうかを確認します。

```
eval `ssh-agent`
```

- ステップ 4** 実行中の SSH エージェントにキーを追加します。

```
ssh-add ~/.ssh/id_rsa
ssh-add ~/.ssh/id_dsa
```

各種のコンポーネントのインストール手順を開始できます。次の 3 つのルールが適用されます。

- `root` ユーザとしてログインします。
- パスワードの入力を必要とするインスタンスでは、`root` パスワードを指定します。

- Shared Database Repository のパスワードを指定する必要があるインスタンスでは、パスワードに特殊文字を含めるようにしてください。パスワードは、引用符で囲む必要があります ('password')。

## Prime Central インストーラ

このインストール手順では、Shared Database Repository VM クレデンシャルを取得する必要があります。詳細については、「[SDR クレデンシャルの取得](#)」(P.2-10) を参照してください。ここでは、Prime Central インストーラのインストールに関する推奨事項を示します。

- `--ssh-push-key` 引数を使用して、パスワードの入力が求められる回数を制限します。
- `--admin-password` 引数と `--prime-admin-password` 引数を指定します。
- スクリプトによって IP アドレスが決定されるので、`--prime-ip-address` 引数は使用しないでください。
- すべての VM で VM root パスワードを同一に保ちます。

ここでは、Prime Central コンポーネントをインストールする手順を説明します。

**ステップ 1** `root` ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts`

**ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./prime_push.py --prime-hostname <prime-hostname> --ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --install-dir <prime-install-dir> --password <prime-vm-root-password> --sdr-hostname <sdr-hostname> --sdr-user <sdr-user> --sdr-password <sdr-password> --im-hostname <Infrastructure-Monitoring_hostname> --sv-hostname <service-visualizer-host-or-ip> [ --prime-ip-address <prime-ip> ] [ --admin-password <admin-password> --prime-admin-password <prime-admin-password> ] [ --ssh-host <ssh-host-or-ip> --ssh-port <ssh-port> ] [ --ssh-push-key ]`

変数を入力するときは、次のガイドラインに留意してください。

- **プライマリ ホスト名**：上記のコマンドでは、`<prime-hostname>` 引数に対してホスト名のみ指定します。ホスト名は、小文字だけで構成する必要があります。IP アドレスは入力しないでください。
- **admin パスワード**：上記のコマンドの引数 `--admin-password` に対して、この VM でパスワードを必要とするすべてのユーザに使用されるパスワードを指定します。admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 5 文字以上、14 文字以内。
  - アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。
- **prime admin パスワード**：引数 `--prime-admin-password` に対して、Prime Central VM 内のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。prime admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、インストール時にパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次に示すガイドラインに準じている必要があります。
  - 8 文字以上、32 文字以内。
  - 文字は、連続 3 回繰り返すことはできません。

- 1 つ以上の大文字 (A ~ Z) を含める必要があります。
- 1 つ以上の小文字 (a ~ z) を含める必要があります。
- 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) を含める必要があります。
- 1 つ以上の特殊文字 -@~ を含める必要があります。
- 感嘆符 (!)、アポストロフィ (')、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、ドル記号 (\$)、疑問符 (?)、抑音符号 (^)、下線 (\_) といった特殊文字は使用できません。
- **cisco** やその他の単語の組み合わせを含めることはできません。



**(注)** 角括弧内の引数は任意です。<ssh-host-or-ip> には、SSH ホストまたは IP アドレスのいずれかを指定できます。引数 **ssh-host** および **ssh-port** は、VM への SSH アクセスに、異なる IP/ホスト名と異なるポート (デフォルト 22 ではない) を使用している場合のみ必要です。たとえば、ステージング サーバが NAT の背後にない場合、この引数を使用します。

## Event Collector インストーラ

Event Collector のインストールには、Prime Central がインストールされて実行中であることが必要です。また、Prime Central が、Prime Central インストーラに対する **prime-hostname** 引数で指定したアドレスに到達できる必要があります。セキュリティ上の理由から、暗号化されていないパスワードは使用しないことを推奨します。

ここでは、Event Collector インストーラに関する推奨事項を示します。

- **--ssh-push-key** 引数を使用して、パスワードの入力が求められる回数を制限します。
- **--admin-password** 引数と **--prime-admin-password** 引数を指定します。
- すべての VM で VM root パスワードを同一に保ちます。
- セキュリティ上の理由から、引数として **nco-pa-password** を指定します。インストーラによって、パスワードの入力が求められ、パスワードはセキュリティ確保のためにただちに暗号化されます。

**ステップ 1** **root** ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 **cd hcm\_installer/scripts/hcm\_install\_scripts**

**ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 **./ec\_push.py --ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --prime-hostname <prime-hostname> [ --admin-password <admin-password> --prime-admin-password <prime-admin-password> ] [--nco-pa-password <ec-os-root-password-from-nco\_pa\_crypt>] [ --ssh-host <ssh-host-or-ip> --ssh-port <ssh-port> ] [ --ssh-push-key ]**

変数を入力するときは、次のガイドラインに留意してください。

- **admin パスワード** : 上記のコマンドの引数 **--admin-password** に対して、この VM でパスワードを必要とするすべてのユーザに使用されるパスワードを指定します。admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。

- 5 文字以上、14 文字以内。
- アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。
- **prime admin パスワード** : 引数 `--prime-admin-password` に対して、Prime Central VM 内のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。prime admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、インストール時にパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次に示すガイドラインに準じている必要があります。
  - 8 文字以上、32 文字以内。
  - 文字は、連続 3 回繰り返すことはできません。
  - 1 つ以上の大文字 (A ~ Z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の小文字 (a ~ z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の特殊文字 -@~ を含める必要があります。
  - 感嘆符 (!)、アポストロフィ (')、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、ドル記号 (\$)、疑問符 (?)、抑音符号 (^)、下線 (\_) といった特殊文字は使用できません。
  - **cisco** やその他の単語の組み合わせを含めることはできません。



(注) 角括弧内の引数は任意です。<ssh-host-or-ip> には、SSH ホストまたは IP アドレスのいずれかを指定できます。

## Correlation Engine インストーラ

Correlation Engine のインストールには、Event Collector がインストールされて実行中であることが必要です。

コンポーネントをインストールするために、Shared Database Repository クレデンシャルが必要です。Shared Database Repository のユーザ名とパスワードを取得します。これらは、Prime Central インストーラで使用したクレデンシャルと同じです。

ここでは、Correlation Engine インストーラのインストールに関する推奨事項を示します。

- `--ssh-push-key` 引数を使用して、パスワードの入力が求められる回数を制限します。
- `--admin-password` 引数を指定します。
- すべての VM で VM root パスワードを同一に保ちます。

ここでは、Correlation Engine コンポーネントをインストールする手順を説明します。

- ステップ 1** `root` ユーザとしてログインします。
- ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts`
- ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./ce_push.py --ce-hostname <correlation-engine-host-with-domain-name> --ec-hostname <event-collector-host-name-with-domain-name-or-ip> --sdr-hostname <sdr-hostname> --sdr-user <sdr-user> --sdr-password <sdr-password>`



```
[ --admin-password <admin-password> ]
[ --ssh-host <ssh-host-or-ip> --ssh-port <ssh-port> ] [ --ssh-push-key ]
```



(注) 引数 `<correlation-engine-host-with-domain-name>` には、完全修飾ドメイン名 (FQDN) としても知られるドメイン名を含むホスト名のみを指定します。IP アドレスは入力しないでください。



(注) 引数 `<event-collector-host-name-with-domain-name-or-ip>` には、IP またはホスト名のいずれかを指定できます。ホスト名を指定する場合は、FQDN と一緒に使用する必要があります。



(注) 上記のコマンドの引数 `--admin-password` に対して、Prime Central VM のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、インストール時にパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。

5 文字以上、14 文字以内。

アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。



(注) 角括弧内の引数は任意です。`<ssh-port-or-ip>` には、SSH ホストまたは IP アドレスのいずれかを指定できます。

## Service Visualizer インストーラ

コンポーネントをインストールするために、Shared Database Repository クレデンシャルが必要です。この章の冒頭で説明したとおり、Shared Database Repository のユーザ名とパスワードを取得します。ここでは、Service Visualizer インストーラのインストールに関する推奨事項を示します。

- `--ssh-push-key` 引数を使用して、パスワードの入力が求められる回数を制限します。
- `--admin-password` 引数と `--prime-admin-password` 引数を指定します。
- すべての VM で VM root パスワードを同一に保ちます。

ここでは、Service Visualizer コンポーネントをインストールする手順を説明します。



(注) Service Visualizer インストールには、Prime Central と Event Collector がインストールされて実行中であることが必要です。また、Prime Central が、Prime Central インストーラに対する `prime-hostname` 引数で指定したアドレスに到達する必要があります。

**ステップ 1** root ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts`

**ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./sv_push.py --sv-hostname <service-visualizer-hostname>`  
`--ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --prime-hostname <prime-hostname>`  
`--sdr-hostname <sdr-hostname> --sdr-user <sdr-user> --sdr-password <sdr-password>`  
`[ --admin-password <admin-password> --prime-admin-password <prime-admin-password> ]`  
`[ --ssh-host <ssh-host-or-ip> --ssh-port <ssh-port> ] [ --ssh-push-key ]`

変数を入力するときは、次のガイドラインに留意してください。

- **プライマリ ホスト名**：上記のコマンドでは、`<prime-hostname>` 引数に対してホスト名のみ指定します。ホスト名は、小文字だけで構成する必要があります。IP アドレスは入力しないでください。`--prime-hostname` 引数に対して入力する値は、Prime Central のインストール時に入力したホスト名と同じである必要があります。
- **root ユーザ**に対して Service Visualizer VM から Prime VM へのパスワード入力を求めないよう、SSH を設定していない場合は、Prime VM root パスワードの入力を求められます。
- **admin パスワード**：上記のコマンドの引数 `--admin-password` に対して、この VM でパスワードを必要とするすべてのユーザに使用されるパスワードを指定します。admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一であることが必要です。パスワードが異なると、再インストールの実行が必要になるおそれがあります。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 5 文字以上、14 文字以内。
  - アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。
- **prime admin パスワード**：引数 `--prime-admin-password` に対して、Prime Central VM 内のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。prime admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、インストール時にパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次に示すガイドラインに準じている必要があります。
  - 8 文字以上、32 文字以内。
  - 文字は、連続 3 回繰り返すことはできません。
  - 1 つ以上の大文字 (A ~ Z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の小文字 (a ~ z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の特殊文字 @~ を含める必要があります。
  - 感嘆符 (!)、アポストロフィ (')、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、ドル記号 (\$)、疑問符 (?)、抑音符号 (')、下線 ( \_ ) といった特殊文字は使用できません。
  - `cisco` やその他の単語の組み合わせを含めることはできません。



**(注)** 角括弧内の引数は任意です。`<ssh-port-or-ip>` には、SSH ホストまたは IP アドレスのいずれかを指定できます。

## Infrastructure Monitoring インストーラ

Infrastructure Monitoring コンポーネントをインストールするには、次の手順に従ってください。ここでは、Infrastructure Monitoring インストーラのインストールに関する推奨事項を示します。

- `--ssh-push-key` 引数を使用して、パスワードの入力が求められる回数を制限します。
- `--admin-password` 引数を指定します。
- すべての VM で VM root パスワードを同一に保ちます。

**ステップ 1** `root` ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts`

**ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./im_push.py --im-hostname <infrastructure-monitoring-host-or-ip> --ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --prime-hostname <prime-central-host-or-ip> --vcenter-hostname <vcenter-hostname> --vcenter-password <vcenter-password> --vcenter-username <vcenter-username> --vcenter-certificate-path <vcenter-ruicrt-path> [ --admin-password <admin-password> ] [ --ssh-host <ssh-host-or-ip> --ssh-port <ssh-port>] [ --ssh-push-key ]`



**(注)** 上記のコマンドの引数 `--admin-password` に対して、Prime Central VM のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、インストール時にパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。

5 文字以上、14 文字以内。

アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。



**(注)** 角括弧内の引数は任意です。 `<ssh-port-or-ip>` には、SSH ホストまたは IP アドレスのいずれかを指定できます。



**(注)** 引数 `--vcenter-certificate-path` は、実際の証明書ファイルの完全パスまたはローカルパスである必要があります (たとえば、`/opt/hcm_installer/ruicrt`)。

## ローカルでステージングしたファイルのターゲット インストール マシンの使用

この方法では、ローカル マシンからリモートのターゲット マシンにインストールをプッシュします。

## Prime Central インストーラ

このインストール手順では、Shared Database Repository VM root アクセスを取得する必要があります。コンポーネントをインストールするために、Shared Database Repository クレデンシヤルが必要です。

ここでは、Prime Central コンポーネントをインストールする手順を説明します。

**ステップ 1** root ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。cd hcm\_installer/scripts/hcm\_install\_scripts

```
次のコマンドを実行します。 ./prime_install.py --prime-hostname
<prime-hostname-DO-NOT-USE-IP> --ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --install-dir
<prime-install-dir>

--password <prime-vm-password> --sdr-hostname <sdr-hostname> --sdr-user <sdr-user>
--sdr-password <sdr-password>

--im-hostname <infrastructure-monitoring_hostname> --sv-hostname
<service-visualizer-host-or-ip>

[ --prime-ip-address <prime-ip> ] [ --admin-password <admin-password>
--prime-admin-password <prime-admin-password> ]
```

変数を入力するときは、次のガイドラインに留意してください。

- **プライマリ ホスト名**：上記のコマンドでは、<prime-hostname> 引数に対してホスト名のみ指定します。ホスト名は、小文字だけで構成する必要があります。IP アドレスは入力しないでください。
- **admin パスワード**：上記のコマンドの引数 --admin-password に対して、この VM でパスワードを必要とするすべてのユーザに使用されるパスワードを指定します。admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 5 文字以上、14 文字以内。
  - アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。
- **prime admin パスワード**：引数 --prime-admin-password に対して、Prime Central VM 内のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。prime admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、インストール時にパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次に示すガイドラインに準じている必要があります。
  - 8 文字以上、32 文字以内。
  - 文字は、連続 3 回繰り返すことはできません。
  - 1 つ以上の大文字 (A ~ Z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の小文字 (a ~ z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の特殊文字 @~ を含める必要があります。
  - 感嘆符 (!)、アポストロフィ (')、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、ドル記号 (\$)、疑問符 (?)、抑音符号 (^)、下線 (\_) といった特殊文字は使用できません。

- `cisco` やその他の単語の組み合わせを含めることはできません。

## Event Collector インストーラ

Event Collector のインストールには、Prime Central がインストールされて実行中であることが必要です。また、Prime Central が、Prime Central インストーラに対する `prime-hostname` 引数で指定したアドレスに到達できる必要があります。セキュリティ上の理由から、暗号化されていないパスワードは使用しないことを推奨します。

**ステップ 1** `root` ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts`

```
次のコマンドを実行します。 ./ec_install.py --ec-hostname <event-collector-host-or-ip>
--prime-hostname <prime-hostname>
[ --admin-password <admin-password> --prime-admin-password <prime-admin-password> ]
[--nco-pa-password <ec-os-root-password-from-nco_pa_crypt> ]
```

変数を入力するときは、次のガイドラインに留意してください。

- **admin パスワード**：上記のコマンドの引数 `--admin-password` に対して、この VM でパスワードを必要とするすべてのユーザに使用されるパスワードを指定します。admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 5 文字以上、14 文字以内。
  - アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。
- **prime admin パスワード**：引数 `--prime-admin-password` に対して、Prime Central VM 内のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。prime admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、インストール時にパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次に示すガイドラインに準じている必要があります。
  - 8 文字以上、32 文字以内。
  - 文字は、連続 3 回繰り返すことはできません。
  - 1 つ以上の大文字 (A ~ Z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の小文字 (a ~ z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の特殊文字 @~ を含める必要があります。
  - 感嘆符 (!)、アポストロフィ (')、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、ドル記号 (\$)、疑問符 (?)、抑音符号 (^)、下線 (\_) といった特殊文字は使用できません。
  - `cisco` やその他の単語の組み合わせを含めることはできません。



(注) 角括弧内の引数は任意です。



- (注) Event Collector を再びインストールする場合には、*nco\_pa\_crypt* から暗号化されたパスワードを使用できません。パスワードを引数として渡すと暗号化されませんが、プロンプトが表示されたときにパスワードを入力すると暗号化されます。

## Correlation Engine インストーラ

コンポーネントをインストールするために、Shared Database Repository クレデンシヤルが必要です。ここでは、Correlation Engine コンポーネントをインストールする手順を説明します。

**ステップ 1** `root` ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts`

**ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./ce_install.py --ce-hostname <correlation-engine-host-with-domain-name-DO-NOT-USE-ip> --ec-hostname <event-collector-host-name-with-domain-name-or-ip> --sdr-hostname <sdr-hostname> --sdr-user <sdr-user> --sdr-password <sdr-password> [ --admin-password <admin-password> ]`



- (注) 引数 `<correlation-engine-host-with-domain-name-DO-NOT-USE-ip>` には、ドメイン名のみを指定します。IP アドレスは入力しないでください。



- (注) 引数 `<event-collector-host-name-with-domain-name-or-ip>` には、IP またはホスト名のいずれかを指定できます。ホスト名を指定する場合は、FQDN と一緒に使用する必要があります。



- (注) 上記のコマンドの引数 `--admin-password` に対して、Prime Central VM のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、インストール時にパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。

5 文字以上、14 文字以内。

アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。

## Service Visualizer インストーラ

コンポーネントをインストールするために、Shared Database Repository クレデンシヤルが必要です。

ここでは、Service Visualizer コンポーネントをインストールする手順を説明します。



(注)

Service Visualizer のインストールには、Prime Central がインストールされて実行中であることが必要です。また、Prime Central が、Prime Central インストーラに対する `prime-hostname` 引数で指定したアドレスに到達できる必要があります。

**ステップ 1** `root` ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts`

**ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./sv_install.py --sv-hostname <service-visualizer-hostname> --ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --prime-hostname <prime-hostname> --sdr-hostname <sdr-hostname> --sdr-user <sdr-user> --sdr-password <sdr-password> [ --admin-password <admin-password> --prime-admin-password <prime-admin-password> ]`

変数を入力するときは、次のガイドラインに留意してください。

- **プライマリ ホスト名**：上記のコマンドでは、`<prime-hostname>` 引数に対してホスト名のみ指定します。ホスト名は、小文字だけで構成する必要があります。IP アドレスは入力しないでください。`--prime-hostname` 引数に対して入力する値は、Prime Central のインストール時に入力したホスト名と同じである必要があります。
- **admin パスワード**：上記のコマンドの引数 `--admin-password` に対して、この VM でパスワードを必要とするすべてのユーザに使用されるパスワードを指定します。admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 5 文字以上、14 文字以内。
  - アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。
- **prime admin パスワード**：引数 `--prime-admin-password` に対して、Prime Central VM 内のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。prime admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、インストール時にパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次に示すガイドラインに準じている必要があります。
  - 8 文字以上、32 文字以内。
  - 文字は、連続 3 回繰り返すことはできません。
  - 1 つ以上の大文字 (A ~ Z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の小文字 (a ~ z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の特殊文字 @~ を含める必要があります。
  - 感嘆符 (!)、アポストロフィ (')、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、ドル記号 (\$)、疑問符 (?)、抑音符号 (^)、下線 ( \_ ) といった特殊文字は使用できません。
  - `cisco` やその他の単語の組み合わせを含めることはできません。

## Infrastructure Monitoring インストーラ

- ステップ 1** root ユーザとしてログインします。
- ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts`
- ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./im_install.py --im-hostname <infrastructure-monitoring-host-or-ip> --ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --prime-hostname <prime-central-host-or-ip> --vcenter-hostname <vcenter-hostname> --vcenter-password <vcenter-password> --vcenter-username <vcenter-username> --vcenter-certificate-path <vcenter-rui-crt-path> [ --admin-password <admin-password> ]`



**(注)** 上記のコマンドの引数 `--admin-password` に対して、Prime Central VM のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、インストール時にパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。

5 文字以上、14 文字以内。

アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。



**(注)** 引数 `--vcenter-certificate-path` は、実際の証明書ファイルの完全パスまたはローカルパスである必要があります (たとえば、`/opt/hcm_installer/rui.crt`)。

## Prime Central for HCS 1.0 からのアップグレード

ここでは、Prime Central for HCS ソフトウェアをバージョン 1.0 からバージョン 1.0.1 にアップグレードする手順を説明します。環境内で以前に Prime Central for HCS 1.0 をインストールしたことがある場合には、フレッシュインストールかアップグレードのいずれかを実行できます。



**(注)** 作業システムをバージョン 1.0.1 にアップグレードする前に、vCenter を使用した Prime Central for HCS 1.0 VM のスナップショットを撮ることを推奨します。このスナップショットは、何らかの理由でアップグレード手順が失敗した場合に、バージョン 1.0 にロールバックするのに役立ちます。

何らかの理由で、VM からコンポーネントをアンインストールした場合は、フレッシュインストールを実行する必要があります。この場合、アップグレードスクリプトは実行しないでください。

次のいずれかの方法で、Prime Central for HCS をアップグレードできます。選択するアップグレード方法は、元のインストールで使用した方法とは無関係です。インストール時に使用した方法を使用する必要はありません。たとえば、コンポーネントの元のインストールで「リモートでステージングしたファイルの使用」の方法を使用した場合は、「リモートでステージングしたファイルの使用」の方法か、「ローカルでステージングしたファイルのターゲットインストールマシンでの使用」の方法のいずれかを使用して同じコンポーネントをアップグレードできます。

- 「リモートでステージングしたファイルの使用」(P.2-23)



- 「ローカルでステージングしたファイルのターゲットインストールマシンでの使用」(P.2-28)



(注) アップグレード手順は、次に示す順序で実行してください。



(注) Prime Central for HCS 1.0 のインストール時に使用したホスト名を、アップグレード手順でも使用する必要があります。

各種のコンポーネントのアップグレード手順を開始できます。次の 3 つのルールが適用されます。

- root ユーザとしてログインします。
- パスワードの入力を必要とするインスタンスでは、root パスワードを指定します。
- Shared Database Repository のパスワードを指定する必要があるインスタンスでは、パスワードに特殊文字を含めるようにしてください。パスワードは、引用符で囲む必要があります ('password')。

## リモートでステージングしたファイルの使用

### Prime Central インストーラ

「SDR クレデンシャルの取得」(P.2-10) で説明したとおりに、SDR クレデンシャルを取得します。アップグレード スクリプトを実行すると、SDR クレデンシャルに対する変更が Prime Central for HCS コンポーネントに反映されます。SDR クレデンシャルを手動で更新する必要はありません。

**ステップ 1** root ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを入力します。cd hcm\_installer/scripts/hcm\_install\_scripts/upgrade

**ステップ 3** 次のコマンドを実行します。./prime\_upgrade\_push.py --prime-hostname  
 <prime-hostname-DO-NOT-USE-IP> --ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --install-dir  
 <prime-install-dir> --password <prime-vm-root-password> --sdr-hostname  
 <sdr-hostname-or-IP> --sdr-user <sdr-user> --sdr-password <sdr-password> --im-hostname  
 <Infrastructure-Monitoring\_hostname\_or\_IP> --sv-hostname  
 <service-visualizer-host-DO-NOT-USE-IP>  
 [ --prime-ip-address <prime-ip> ] [ --mem-check-warn ] [ --admin-password <admin\_password>  
 --prime-admin-password <prime\_admin\_password> --orig-prime-admin-password  
 <orig\_prime\_admin\_password> ] [ --ssh-host <ssh-host-or-ip> --ssh-port <ssh-port> ] [  
 --ssh-push-key ]

- prime\_upgrade\_push.py ディレクトリは、Prime Central for HCS 1.0 のインストール時に使用したディレクトリと同一であることが必要です。
- すべての VM 間で VM root パスワードを同一に保つことを推奨します。
- プライマリ ホスト名 : 上記のコマンドでは、<prime-hostname> 引数に対してホスト名のみ指定します。ホスト名は、小文字だけで構成する必要があります。IP アドレスは入力しないでください。

- **admin パスワード** : 上記のコマンドでは引数 `--admin-password` に対して、バージョン 1.0 のインストール時に入力したパスワードを指定します。admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを指定すると、再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときにパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 5 文字以上、14 文字以内。
  - アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。
- `--orig-prime-admin-password` は、バージョン 1.0 のインストール時に使用した `--prime-admin-password` です。
- **prime admin パスワード** : 引数 `--prime-admin-password` に対して、Prime Central VM 内のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。prime admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときにパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 8 文字以上、32 文字以内。
  - 文字は、連続 3 回繰り返すことはできません。
  - 1 つ以上の大文字 (A ~ Z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の小文字 (a ~ z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の特殊文字 @~ を含める必要があります。
  - 感嘆符 (!)、アポストロフィ (')、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、ドル記号 (\$)、疑問符 (?)、抑音符号 (^)、下線 (\_) といった特殊文字は使用できません。
  - `cisco` やその他の単語の組み合わせを含めることはできません。

## Event Collector のアップグレード

次の手順に従って、Event Collector コンポーネントをアップグレードします。

- 
- ステップ 1** `root` ユーザとしてログインします。
- ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts/upgrade`
- ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./ec_upgrade_push.py --ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --prime-hostname <prime-hostname-or_IP> [ --admin-password <admin-password> --prime-admin-password <prime-admin-password> ] [ --ssh-host <ssh-host-or-ip> --ssh-port <ssh-port> ] [ --ssh-push-key ]`
- 

- `root` ユーザに対して Event Collector VM から Prime Central VM へのパスワード入力を求めないよう、SSH を設定していない限り、Prime Central VM `root` パスワードを入力するように求められます。すべての VM 間で VM `root` パスワードを同一に保つことを推奨します。
- **プライマリ ホスト名** : 上記のコマンドでは、`<prime-hostname>` 引数に対してホスト名のみ指定します。ホスト名は、小文字だけで構成する必要があります。IP アドレスは入力しないでください。

- **admin パスワード** : 上記のコマンドでは引数 `--admin-password` に対して、バージョン 1.0 のインストール時に入力したパスワードを指定します。admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを指定すると、再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときにパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 5 文字以上、14 文字以内。
  - アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。
- **prime admin パスワード** : 引数 `--prime-admin-password` に対して、Prime Central VM 内のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。prime admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときにパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 8 文字以上、32 文字以内。
  - 文字は、連続 3 回繰り返すことはできません。
  - 1 つ以上の大文字 (A ~ Z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の小文字 (a ~ z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の特殊文字 @~ を含める必要があります。
  - 感嘆符 (!)、アポストロフィ (')、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、ドル記号 (\$)、疑問符 (?)、抑音符号 (^)、下線 (\_) といった特殊文字は使用できません。
  - `cisco` やその他の単語の組み合わせを含めることはできません。

## Correlation Engine インストーラ

「SDR クレデンシャルの取得」(P.2-10) で説明したとおりに、SDR クレデンシャルを取得します。アップグレード スクリプトを実行すると、SDR クレデンシャルに対する変更が Prime Central for HCS コンポーネントに反映されます。SDR クレデンシャルを手動で更新する必要はありません。

ここでは、Correlation Engine コンポーネントをアップグレードする手順を説明します。

- 
- ステップ 1** `root` ユーザとしてログインします。
- ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts/upgrade`
- ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./ce_upgrade_push.py --ce-hostname`  
`<correlation-engine-host-with-domain-name-DO-NOT-USE-IP> --ec-hostname`  
`<event-collector-host-name-with-domain-name-or-ip>`  
`--sdr-hostname <sdr-hostname-OR-IP> --sdr-user <sdr-user> --sdr-password <sdr-password>`  
`[ --admin-password <admin-password> ]`  
`[ --ssh-host <ssh-host-or-ip> --ssh-port <ssh-port> ] [ --ssh-push-key ]`
- 



(注) すべての VM 間で VM root パスワードを同一に保つことを推奨します。



(注) 引数 `<correlation-engine-host-with-domain-name-DO-NOT-USE-ip>` には、ドメイン名のみを指定します。IP アドレスは入力しないでください。



(注) 引数 `<event-collector-host-name-with-domain-name-or-ip>` には、IP またはホスト名のいずれかを指定できます。ホスト名を指定する場合は、FQDN と一緒に使用する必要があります。



(注) 上記のコマンドの引数 `--admin-password` に対して、Prime Central VM のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときにパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。

5 文字以上、14 文字以内。

アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。

## Service Visualizer インストーラ

「SDR クレデンシャルの取得」(P.2-10) で説明したとおりに、SDR クレデンシャルを取得します。アップグレードスクリプトを実行すると、SDR クレデンシャルに対する変更が Prime Central for HCS コンポーネントに反映されます。SDR クレデンシャルを手動で更新する必要はありません。

次に、Service Visualizer コンポーネントをアップグレードする手順を説明します。



(注) Service Visualizer のアップグレードには、Prime Central がインストールされて実行中であることが必要です。また、Prime Central が、Prime Central インストーラに対する `prime-hostname` 引数で指定したアドレスに到達できる必要があります。

**ステップ 1** `root` ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts/upgrade`

**ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./sv_upgrade_push.py --sv-hostname <service-visualizer-hostname-DO-NOT-USE-IP> --ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --prime-hostname <prime-hostname-DO-NOT-USE-IP> --sdr-hostname <sdr-hostname-OR-IP> --sdr-user <sdr-user> --sdr-password <sdr-password> [ --admin-password <admin-password> --prime-admin-password <prime-admin-password> ] [ --ssh-host <ssh-host-or-ip> --ssh-port <ssh-port> ] [ --ssh-push-key ]`

変数を入力するときは、次のガイドラインに留意してください。

- root ユーザに対して Event Collector VM から Prime Central VM へのパスワード入力を求めないよう、SSH を設定していない限り、Prime Central VM root パスワードを入力するように求められます。すべての VM 間で VM root パスワードを同一に保つことを推奨します。
- **プライマリ ホスト名**：上記のコマンドでは、<prime-hostname> 引数に対してホスト名のみ指定します。ホスト名は、小文字だけで構成する必要があります。IP アドレスは入力しないでください。--prime-hostname 引数に対して入力する値は、Prime Central のインストール時に入力したホスト名と同じである必要があります。
- **admin パスワード**：上記のコマンドでは引数 --admin-password に対して、バージョン 1.0 のインストール時に入力したパスワードを指定します。admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを指定すると、再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときにパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 5 文字以上、14 文字以内。
  - アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。
- **prime admin パスワード**：引数 --prime-admin-password に対して、Prime Central VM 内のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。prime admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときにパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 8 文字以上、32 文字以内。
  - 文字は、連続 3 回繰り返すことはできません。
  - 1 つ以上の大文字 (A ~ Z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の小文字 (a ~ z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の特殊文字 @~ を含める必要があります。
  - 感嘆符 (!)、アポストロフィ (')、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、ドル記号 (\$)、疑問符 (?)、抑音符号 (^)、下線 (\_) といった特殊文字は使用できません。
  - cisco やその他の単語の組み合わせを含めることはできません。

## Infrastructure Monitoring インストーラ

アップグレードプロセスでは、Prime Central for HCS 1.0 の手動インストール手順で設定したすべての Infrastructure Monitoring 設定が保持されます。

**ステップ 1** root ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。cd hcm\_installer/scripts/hcm\_install\_scripts/upgrade

```
次のコマンドを実行します。./im_upgrade_push.py --im-hostname
<infrastructure-monitoring-host-or-ip> --ec-hostname <event-collector-host-or-ip>
--prime-hostname <prime-central-host-or-ip> --vcenter-hostname <vcenter-host-or-ip>
--vcenter-username <vcenter-username> --vcenter-password <vcenter-user-password>[
--admin-password <admin-password> ]
[ --ssh-host <ssh-host-or-ip> --ssh-port <ssh-port>][ --ssh-push-key ]
```



(注) root ユーザに対して Infrastructure Monitoring VM から Prime Central VM へのパスワード入力を求めないよう、SSH を設定していない限り、Prime Central VM root パスワードを入力するように求められます。すべての VM 間で VM root パスワードを同一に保つことを推奨します。



(注) 上記のコマンドの引数 `--admin-password` に対して、Prime Central VM のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、インストール時にパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。

5 文字以上、14 文字以内。

アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。

## ローカルでステージングしたファイルのターゲット インストール マシンでの使用

ここでは、ローカルでステージングしたファイルを使用してコンポーネントをインストールする方法を説明します。次のガイドラインに留意してください。

- メディア フォルダは /root フォルダの下に置かないでください。権限の問題が発生します。
- /nfs mount メソッドを使用しないでください。

### Prime Central インストーラ

「SDR クレデンシャルの取得」(P.2-10) で説明したとおりに、SDR クレデンシャルを取得します。アップグレード スクリプトを実行すると、SDR クレデンシャルに対する変更が Prime Central for HCS コンポーネントに反映されます。SDR クレデンシャルを手動で更新する必要はありません。

**ステップ 1** root ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts/upgrade`

**ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./prime_upgrade.py --prime-hostname <prime-hostname-DO-NOT-USE-IP> --ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --install-dir <prime-install-dir>`

```
--password <prime-vm-password> --sdr-hostname <sdr-hostname-OR-IP> --sdr-user <sdr-user>
--sdr-password <sdr-password>

--im-hostname <MMInfrastructure-monitoring_hostname-OR-IP> --sv-hostname
<service-visualizer-host-DO-NOT-USE-IP>

[ --prime-ip-address <prime-ip> ] [ --mem-check-warn ] [ --admin-password
<admin_password> --prime-admin-password <REPrime_admin_password>
--orig-prime-admin-password <orig_prime_admin_password> ]
```

- prime\_upgrade.py ディレクトリは、Prime Central for HCS 1.0 のインストール時に使用したディレクトリと同一である必要があります。

- **プライマリ ホスト名**：上記のコマンドでは、`<prime-hostname>` 引数に対してホスト名のみ指定します。ホスト名は、小文字だけで構成する必要があります。IP アドレスは入力しないでください。
- **admin パスワード**：上記のコマンドでは引数 `--admin-password` に対して、バージョン 1.0 のインストール時に入力したパスワードを指定します。admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを指定すると、再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときにパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 8 文字以上、32 文字以内。
  - アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。
- `--orig-prime-admin-password` は、バージョン 1.0 のインストール時に使用した `--prime-admin-password` です。
- **prime admin パスワード**：引数 `--prime-admin-password` に対して、Prime Central VM 内のユーザー用に複雑なパスワードを指定します。prime admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときにパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 8 文字以上、32 文字以内。
  - 文字は、連続 3 回繰り返すことはできません。
  - 1 つ以上の大文字 (A ~ Z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の小文字 (a ~ z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の特殊文字 @~ を含める必要があります。
  - 感嘆符 (!)、アポストロフィ (')、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、ドル記号 (\$)、疑問符 (?)、抑音符号 (^)、下線 (\_) といった特殊文字は使用できません。
  - `cisco` やその他の単語の組み合わせを含めることはできません。

## Event Collector インストーラ

- 
- ステップ 1** `root` ユーザとしてログインします。
- ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts/upgrade`
- ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./ec_upgrade.py --ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --prime-hostname <prime-hostname-OR-IP> [ --admin-password <admin-password> --prime-admin-password <prime-admin-password> ]`
- 

- `root` ユーザに対して Event Collector VM から Prime Central VM へのパスワード入力を求めないよう、SSH を設定していない限り、Prime Central VM `root` パスワードを入力するように求められます。
- **プライマリ ホスト名**：上記のコマンドでは、`<prime-hostname>` 引数に対してホスト名のみ指定します。ホスト名は、小文字だけで構成する必要があります。IP アドレスは入力しないでください。

- **admin パスワード** : 上記のコマンドでは引数 `--admin-password` に対して、バージョン 1.0 のインストール時に入力したパスワードを指定します。admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを指定すると、再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときにパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 5 文字以上、14 文字以内。
  - アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。
- **prime admin パスワード** : 引数 `--prime-admin-password` に対して、Prime Central VM 内のユーザーに複雑なパスワードを指定します。prime admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときにパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 8 文字以上、32 文字以内。
  - 文字は、連続 3 回繰り返すことはできません。
  - 1 つ以上の大文字 (A ~ Z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の小文字 (a ~ z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の特殊文字 @~ を含める必要があります。
  - 感嘆符 (!)、アポストロフィ (')、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、ドル記号 (\$)、疑問符 (?)、抑音符号 (^)、下線 (\_) といった特殊文字は使用できません。
  - `cisco` やその他の単語の組み合わせを含めることはできません。

## Correlation Engine インストーラ

「SDR クレデンシャルの取得」(P.2-10) で説明したとおりに、SDR クレデンシャルを取得します。アップグレード スクリプトを実行すると、SDR クレデンシャルに対する変更が Prime Central for HCS コンポーネントに反映されます。SDR クレデンシャルを手動で更新する必要はありません。

ここでは、Correlation Engine コンポーネントをアップグレードする手順を説明します。

- 
- ステップ 1** `root` ユーザとしてログインします。
- ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_script/upgrade`
- ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./ce_upgrade.py --ce-hostname`  
`<correlation-engine-host-with-domain-name-DO-NOT-USE-IP> --ec-hostname`  
`<event-collector-host-name-with-domain-name-or-ip>`  
`--sdr-hostname <sdr-hostname-OR-IP> --sdr-user <sdr-user> --sdr-password <sdr-password>`  
`[ --admin-password <admin-password> ]`
- 



(注) 引数 `<correlation-engine-host-with-domain-name-DO-NOT-USE-ip>` には、ドメイン名のみを指定します。IP アドレスは入力しないでください。





(注) 引数 `<event-collector-host-name-with-domain-name-or-ip>` には、IP またはホスト名のいずれかを指定できます。ホスト名を指定する場合は、FQDN と一緒に使用する必要があります。



(注) 上記のコマンドの引数 `--admin-password` に対して、Prime Central VM のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときにパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。

5 文字以上、14 文字以内。

アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。

## Service Visualizer インストーラ

「SDR クレデンシャルの取得」(P.2-10) で説明したとおりに、SDR クレデンシャルを取得します。アップグレード スクリプトを実行すると、SDR クレデンシャルに対する変更が Prime Central for HCS コンポーネントに反映されます。SDR クレデンシャルを手動で更新する必要はありません。

次に、Service Visualizer コンポーネントをアップグレードする手順を説明します。



(注) Service Visualizer のアップグレードには、Prime Central がインストールされて実行中である必要があります。また、Prime Central が、Prime Central インストーラに対する `prime-hostname` 引数で指定したアドレスに到達できる必要があります。

**ステップ 1** `root` ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts/upgrade`

**ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./sv_install.py --sv-hostname <service-visualizer-hostname-DO-NOT-USE-IP> --ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --prime-hostname <prime-hostname> --sdr-hostname <sdr-hostname-OR-IP> --sdr-user <sdr-user> --sdr-password <sdr-password> [ --admin-password <admin-password> --prime-admin-password <prime-admin-password> ]`

変数を入力するときは、次のガイドラインに留意してください。

- `root` ユーザに対して Event Collector VM から Prime Central VM へのパスワード入力を求めないよう、SSH を設定していない限り、Prime Central VM `root` パスワードを入力するように求められます。
- **プライマリ ホスト名**：上記のコマンドでは、`<prime-hostname>` 引数に対してホスト名のみ指定します。ホスト名は、小文字だけで構成する必要があります。IP アドレスは入力しないでください。`--prime-hostname` 引数に対して入力する値は、Prime Central のインストール時に入力したホスト名と同じである必要があります。

- **admin パスワード** : 上記のコマンドでは引数 `--admin-password` に対して、バージョン 1.0 のインストール時に入力したパスワードを指定します。admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを指定すると、再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときに入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 5 文字以上、14 文字以内。
  - アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。
- **prime admin パスワード** : 引数 `--prime-admin-password` に対して、Prime Central VM 内のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。prime admin パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、アップグレードするときに入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。
  - 8 文字以上、32 文字以内。
  - 文字は、連続 3 回繰り返すことはできません。
  - 1 つ以上の大文字 (A ~ Z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の小文字 (a ~ z) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) を含める必要があります。
  - 1 つ以上の特殊文字 @~ を含める必要があります。
  - 感嘆符 (!)、アポストロフィ (')、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、ドル記号 (\$)、疑問符 (?)、抑音符号 (^)、下線 (\_) といった特殊文字は使用できません。
  - `cisco` やその他の単語の組み合わせを含めることはできません。

## Infrastructure Monitoring インストーラ

アップグレードプロセスでは、Prime Central for HCS 1.0 の手動インストール手順で設定したすべての Infrastructure Monitoring 設定が保持されます。

**ステップ 1** `root` ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。 `cd hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts/upgrade`

**ステップ 3** 次のコマンドを実行します。 `./im_upgrade_push.py --im-hostname <infrastructure-monitoring-host-or-ip> --ec-hostname <event-collector-host-or-ip> --vcenter-hostname <vcenter-host-or-ip> --vcenter-username <vcenter-username> --vcenter-password <vcenter-user-password>[ --admin-password <admin-password> ]`



(注) 上記のコマンドの引数 `--admin-password` に対して、Prime Central VM のユーザ用に複雑なパスワードを指定します。パスワードは、5 台の VM すべてで同一である必要があります。異なるパスワードを使用すると、コンポーネントの再インストールが必要になるおそれがあります。コマンドライン引数にパスワードを指定しないと、インストール時にパスワードを入力するように求められます。パスワードは、次のガイドラインに準じている必要があります。

5 文字以上、14 文字以内。

アスタリスク (\*)、ハイフン (-)、およびパーセンテージ (%) といった特殊文字は使用できません。

## 失敗したアップグレード手順からの回復

作業システムをバージョン 1.0.1 にアップグレードする前に、vCenter を使用した Prime Central for HCS 1.0 VM のスナップショットを撮ることを推奨します。このスナップショットは、何らかの理由でアップグレード手順が失敗した場合に、バージョン 1.0 にロールバックするのに役立ちます。

ただし、仮想マシンのスナップショットがない場合には、Prime Central for HCS の 5 つのコンポーネントをすべてアンインストールして、フレッシュ インストールを実行する必要があります。

## Prime Central for HCS のインストール後

5 つのコンポーネントをインストールしてから、次のインストール後のタスクを行ってインストールを完了してください。

## Infrastructure Monitoring : エージェントレス設定

ここでは、エージェントレス設定を完了する手順を説明します。スクリプトの実行に進む前に、次に示す前提条件を必ずお読みください。

この項の内容は、ネットワークで vCenter、CUCDM、CUOM、CUIC、および CCMP を使用している場合のみ適用します。ただし、次の手順を完了するには、vCenter が必要です。



(注) この項に示すスクリプトを実行して、追加のサーバインスタンスを作成することはできません。追加のサーバインスタンスを作成するには、「[サーバインスタンスの追加](#)」(P.2-34) を参照してください。

- すべてのリモート VM が SNMP に対応していて、到達可能であることが必要です。詳細については、「[Windows 2008 および Linux Server での SNMP のイネーブル化](#)」(P.2-35) を参照してください。
- VCenter、CUCDM、CUOM、CUIC、および CCMP のホスト名の長さは、20 字以内にする必要があります。
- スクリプトの実行時には、各 VM が起動し、動作していることが必要です。マシンが停止していると、インストールは強制終了します。たとえば、スクリプト `linux_agentless_config_vCenter.sh` の実行時には、VCenter VM サーバが起動し、動作している必要があります。
- 追加するすべての VM に完全修飾ドメイン名 (FQDN) が必要です。IP アドレスは作用しません。

- DB2 パスワードの入力を求められたら、Infrastructure Monitoring のインストール時に `admin-password` 引数に指定したパスワードを使用します。



(注)

その他のスクリプトを実行する前に、まず、vCenter スクリプトを実行することが重要です。

**ステップ 1** Infrastructure Monitoring マシンで、**root** ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** `/opt/prime-central-hcs/situations/Cisco_HCM_ITM` ディレクトリに移動します。

**ステップ 3** 次のスクリプトは、記載されている順序で実行してください。

- `./linux_agentless_config_VCenter.sh <FQ VCenter Hostname> <Community String>`
- `./linux_agentless_config_CUOM.sh <FQ CUOM Hostname> <Community String>`
- `./linux_agentless_config_CUCDM.sh <FQ CUCDM Hostname> <Community String>`
- `./linux_agentless_config_CCMP.sh <FQ CCMP Hostname> <Community String>`
- `./linux_agentless_config_CUIC.sh <FQ CUIC Hostname> <Community String>`

## サーバインスタンスの追加

ここでは、エージェントレス Linux OS エージェントにサーバインスタンスを追加する手順を説明します。次に示すスクリプトを使用して、Infrastructure Monitoring に CUOM、CUCDM、VCenter、CCMP、および CUIC サーバインスタンスを追加できます。

**ステップ 1** **root** ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** `/opt/prime-central-hcs/situations/Cisco_HCM_ITM` に移動し、スクリプトを取得します。

**ステップ 3** 次のスクリプトを実行します。



(注) 次のスクリプトは、任意の順序で実行できます。

- ```
./linux_agentless_add_VCenter.sh <FQ VCenter Hostname> <Community String>
./linux_agentless_add_CUOM.sh <FQ CUOM Hostname> <Community String>
./linux_agentless_add_CUCDM.sh <FQ CUCDM Hostname> <Community String>
./linux_agentless_add_CCMP.sh <FQ CCMP Hostname> <Community String>
./linux_agentless_add_CUIC.sh <FQ CUIC Hostname> <Community String>
```

## 付加的なインストール後のタスクの実行

ここでは、Prime Central for HCS のインストール後に実行できるインストール後の付加的な手順を説明します。この手順は任意です。

## Windows 2008 および Linux Server での SNMP のイネーブル化

ここでは、Windows 2008 および Linux で SNMP をイネーブルにする手順について説明します。

### Windows 2008 での SNMP のイネーブル化

ここでは、Windows 2008 で SNMP をイネーブルにする手順を説明します。

- 
- ステップ 1 [Start] をクリックします。
  - ステップ 2 [Control Panel] > [Classic View] > [Programs and Features] に移動します。[Turn Windows Features On or Off] をクリックします。
  - ステップ 3 [Server Manager] ページの [Features Summary] 領域にある、[Add Features] をクリックします。
  - ステップ 4 [SNMP Services] チェックボックスをオンにします。[Next] をクリックします。
  - ステップ 5 [Confirm Installation Selections] ダイアログ ボックスで、[Install] をクリックします。  
SNMP サービスが自動的に開始されます。これには、ネットワーク デバイスでのアクティビティをモニタし、ネットワーク コンソール ワークステーションに報告するエージェントが含まれます。
  - ステップ 6 [Start] をクリックします。
  - ステップ 7 [Control Panel] > [Classic View] > [Administrative Tools] > [Services] に移動します。
  - ステップ 8 リストで、[SNMP Service] を右クリックして、[Properties] を選択します。  
[SNMP Service Properties] ウィンドウが開きます。
  - ステップ 9 [Security] タブの [Accepted Communities] 領域にある、[Add] をクリックします。
  - ステップ 10 [Rights] ドロップダウン リストで、[READ ONLY] を選択します。
  - ステップ 11 [Community Name] フィールドに、**public** などの名前を入力します。
  - ステップ 12 [OK] をクリックします。
  - ステップ 13 [Add] ボタンをクリックし、[Accept SNMP Packets from Any Host] を選択します。
  - ステップ 14 [OK] をクリックします。
  - ステップ 15 SNMP サービスを再開します。サービスを再開するには、[Start] をクリックします。[Control Panel] > [Classic View] > [Administrative Tools] > [Services] に移動します。リストで、[SNMP Service] を右クリックして、[Restart] をクリックします。
- 

### Linux での SNMP のイネーブル化

yum インストールを使用する場合、次に示す手順に従ってください。

- 
- ステップ 1 **root** ユーザとしてログインします。
  - ステップ 2 次のコマンドを実行します。

```
yum install net-snmp
yum install net-snmp-utils
```

パッケージがすでにインストールされている場合は、その旨を示すメッセージが表示されます。パッケージがまだインストールされていない場合は、インストールされます。

**ステップ 3** データをバックアップします。

```
backup /etc/snmp/snmpd.conf
```

**ステップ 4** HOST-RESOURCES-MIB (RFC 2790) に応答するように、SNMP デーモンを設定します。snmpd.conf ファイルを /etc/snmp/snmpd.conf にコピーします。

**ステップ 5** root ユーザとして snmpd サービスを開始します。

```
service snmpd start
```

**ステップ 6** 次の snmpwalk を実行して確認します。

```
snmpwalk -v 1 -m all -c Community-Name localhost 1.3.6.1.2.1.25
```

## SNMP 接続のテスト

Infrastructure Monitoring マシンから、次のコマンドを実行します。

```
snmpwalk -v 1 -c Community-Name Hostname-or-IP-address-of-remote-VM
```

Prime Central for HCS のインストールは、これで完了です。今すぐアプリケーションにログインして、確認できます。

## Prime Central for HCS のアンインストール

コンポーネントをアンインストールするには、次のコマンドを実行します。スクリプトで判別できない場合を除いて、アンインストールする個々のコンポーネントの名前を指定しないでください。システムは、インストールされたコンポーネントを自動で検出し、アンインストールします。特定の 1 つのコンポーネントをアンインストールする必要がある場合は、SSH を介して仮想マシンに接続し、次の手順に従ってスクリプトを実行します。スクリプトは、ローカル マシンでのみ実行する必要があります。必ず、コンポーネントがインストールされた仮想マシンでスクリプトを実行してください。

`remove-install-logs` は、以前のインストールからログをクリアします。

**ステップ 1** root ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** `cd /opt/hcm_installer/scripts/hcm_install_scripts`

**ステップ 3** `clean` コマンドを実行します。

```
./clean.py [ --remove-primecentral ]
           [ --remove-ec ]
           [ --remove-sv ]
           [ --remove-ce ]
           [ --remove-im ]
           [ --remove-install-logs]
```

## データのバックアップと復元

バックアップと復元のコマンドは、コマンドライン インターフェイスから手動で実行する必要があります。スクリプトは Python に基づきます。すべてのコンポーネントはオンライン モードでバックアップされ、動作中のシステムにはわずかな影響しかありません。この手順は、イベントが少ないと予想されるときに実行することを推奨します。ただし、コンポーネントをしばらく停止しなければならないので、データの復元はメンテナンス時に行う必要があります。バックアップと復元のスクリプトは、製品 DVD から使用できます。



**(注)** Service Visualizer プロセスは、バックアップ プロセス中に再開されます。このため、バックアップ手順中はしばらくの間 Prime Central AEL および Service Availability ポートレットにアクセスできなくなります。

バックアップと復元のスクリプトを実行すると、次のコンポーネントが（記載されている組み込みユーティリティとともに）バックアップおよび復元されます。次のリストは、コンポーネントがバックアップおよび復元される順序を示しています。

1. Prime Central : Oracle EE データベースを伴う Prime Central と組み込みユーティリティ。
2. Event Collector : Event Collector Object Server データベースと、nco\_sql および ALTER SYSTEM BACKUP コマンド。
3. Service Visualizer : Service Visualizer データベースと rad\_db コマンド。Service Visualizer WebGUI の設定と ws\_ant.sh コマンド。
4. Correlation Engine : Correlation Engine の設定と、nci\_export および nci\_import コマンド。
5. Infrastructure Monitoring : Infrastructure Monitoring の設定と、migrate-export.sh および migrate-import.sh スクリプト。Infrastructure Monitoring 上の DB2 データベースと、「db2 backup database ...」および「db2 restore database ...」コマンド。

## データをバックアップする前に

バックアップ手順を実行する前に、次の条件が満たされていることを確認します。

- スクリプトは、動作中の Prime Central for HCS システムで実行する必要があります。
- スクリプトは、Prime Central for HCS の 5 つのコンポーネントに SSH でアクセスできるセントラル マシンで実行する必要があります。
- バックアップ python スクリプトには、次の 6 つのコマンドライン引数があり、データを入力する必要があります。
  - Prime Central VM の IP アドレス
  - Event Collector VM の IP アドレス
  - Service Visualizer VM の IP アドレス
  - Correlation Engine VM の IP アドレス
  - Infrastructure Monitoring VM の IP アドレス
  - バックアップ ファイルが配置される、ローカル マシン上のバックアップ ディレクトリ。存在しない場合は、ディレクトリが作成されます。ディレクトリは、フル パスまたはローカル パスのいずれかになります。

### netrc ファイル

netrc ファイルには、各 VM のユーザ名とパスワードが含まれます。netrc ファイルを作成し、保持する必要があります。netrc ファイルは、.netrc を使用して作成する通常のファイルです（非表示ファイルにするために、名前の前にドットを付けます）。任意のテキスト エディタを使用してファイルを作成し、適切なマシン名とクレデンシャルを挿入できます。たとえば、Linux マシンには vi、emacs、および gedit といったテキスト エディタがあります。

次に示すガイドラインに従ってください。

- netrc ファイルに適切な権限が設定されていることを確認します。netrc ファイルに必要な権限は、所有者用の読み取りおよび書き込みアクセスのみです。この権限は、Linux では権限 600 または rw となります。
- netrc ファイルには、マシンの IP アドレスと、各コンポーネントに対するバックアップ コマンドの実行権限を持つユーザのクレデンシャルが保存されている必要があります。



#### 注意

netrc ファイル内のデフォルトのユーザ名とパスワードは任意です。ただし、デフォルトのクレデンシャルを指定する場合、コマンドライン オプションと netrc ファイルの IP アドレスが一致しないと、スクリプトはデフォルトで、デフォルト ユーザ クレデンシャルを使用します。手順が正常に進行しているように見えても、ログインしているマシンでは別のユーザ名が使用されるため、後から問題が生じるおそれがあります。

- マシンの各 IP アドレスには、マシンを識別するための特定の ID が付加されている必要があります。たとえば、マシン *IP Address-pc* は、Prime Central コンポーネントを示します。
- これは、複数のコンポーネントが同一のマシンにインストールされる可能性があり、netrc ファイルでユーザ名とパスワードを検索するときに問題が生じる場合があるためです。

次に、netrc ファイルの例を示します。

```
machine IP-address-pc
login root
password cisco123

machine IP-address-ec-os
login root
password se032c

machine IP-address-ec-sql
login root
password cisco123

machine IP-address-sv-os
login root
password smartway

machine IP-address-sv-tip
login tipadmin
password cisco123

machine IP-address-ce
login netcool
password smartway

machine IP-address-im
login root
password se032c

default
login netcool
```



```
password smartway
```

バックアップ プロセスを完了するには、netrc ファイルに次の入力を行います。

表 2-5 バックアップスクリプトに対する入力

| コンポーネント                   | ユーザ      | 説明                                                                      |
|---------------------------|----------|-------------------------------------------------------------------------|
| Prime Central             | root     | Prime Central VM に SSH 接続し、Oracle EE のバックアップを設定するために、root OS アクセスが必要です。 |
| Event Collector-OS        | root     | VM に SSH 接続し、Event Collector バックアップを設定するために、root OS アクセスが必要です。          |
| Event Collector-SQL       | root     | nco_sql コマンドにアクセスするために、root Event Collector データベース ユーザが必要です。            |
| Service Visualizer-OS     | root     | VM に SSH 接続し、復元スクリプトを実行するために、root OS アクセスが必要です。                         |
| Service Visualizer        | tipadmin | Service Visualizer サーバにアクセスできるユーザ (tipadmin など) が必要です。                  |
| Correlation Engine        | netcool  | Correlation Engine nci_import コマンドにアクセスできるユーザ (netcool など) が必要です。       |
| Infrastructure Monitoring | root     | VM に SSH 接続し、バックアップ スクリプトを実行するために、root OS アクセスが必要です。                    |

## データのバックアップ

バックアップ スクリプトは、製品 DVD に収録されています。デフォルトでは、バックアップ スクリプトは、pc.netrc という名前の付いたバックアップ スクリプトと同じディレクトリで、netrc ファイルを検索します。このデフォルト名と場所を無効にするには、環境変数 PC\_NETRC\_FILE を使用します。例：

```
export PC_NETRC_FILE=/home/netcool/.netrc
```

次のスクリプトでは、IP アドレスを、netrc ファイルで指定した IP アドレスに置き換えます。

```
./backup.py Prime-Central-IP Event-Collector-Engine-IP Service-Visualizer-IP  
Correlation-Engine-IP Infrastructure-Monitoring-IP Backup-Directory
```

バックアップ スクリプトを実行すると、5 つのコンポーネントがすべて一度にバックアップされます。バックアップ手順が正常に終了すると、tar ファイルが作成され、コマンド ライン引数で指定したバックアップ ディレクトリに配置されます。バックアップ ファイルの命名規則は、*backup-**<timestamp>**.tar* です。バックアップ手順が正常に終了した場合は、終了時の戻りコードがゼロになります (バックアップに失敗したコンポーネントがないことを示します)。

コンポーネントがバックアップ プロセスに失敗すると、その旨を伝えるメッセージがコンソールに表示されます。ただし、バックアップ スクリプトは、残りのコンポーネントのバックアップを続けます。スクリプトが実行し終わると、終了時の戻りコードがゼロ以外の値になります。これは、バックアップされなかったコンポーネントの数を示します。このような部分的な実行の場合には、tar ファイルの命名規則が *partial-backup-**<timestamp>**.tar* となります。

## データを復元する前に

復元手順を実行する前に、次の条件が満たされていることを確認します。

- スクリプトは、動作中の Prime Central for HCS システムで実行する必要があります。
- スクリプトは、Prime Central for HCS の 5 つのコンポーネントに SSH でアクセスできるセントラルマシンで実行する必要があります。
- 復元 python スクリプトには、次の 6 つのコマンドライン引数があり、データを入力する必要があります。
  - Prime Central VM の IP アドレス
  - Event Collector VM の IP アドレス
  - Service Visualizer VM の IP アドレス
  - Correlation Engine VM の IP アドレス
  - Infrastructure Monitoring VM の IP アドレス
  - 前のバックアップからのバックアップファイル名。バックアップファイルの場所は、フルパスまたはローカルパスになります。

### netrc ファイル

netrc ファイルには、各 VM のユーザ名とパスワードが含まれます。netrc ファイルを作成し、保持する必要があります。netrc ファイルは、.netrc を使用して作成する通常のファイルです（非表示ファイルにするために、名前の前にドットを付けます）。任意のテキストエディタを使用してファイルを作成し、適切なマシン名とクレデンシャルを挿入できます。たとえば、Linux マシンには vi、emacs、および gedit といったテキストエディタがあります。

次に示すガイドラインに従ってください。

- netrc ファイルに適切な権限が設定されていることを確認します。netrc ファイルに必要な権限は、所有者用の読み取りおよび書き込みアクセスのみです。この権限は、Linux では権限 600 または rw となります。
- netrc ファイルには、マシンの IP アドレスと、各コンポーネントに対するバックアップコマンドの実行権限を持つユーザのクレデンシャルが保存されている必要があります。



#### 注意

netrc ファイル内のデフォルトのユーザ名とパスワードは任意です。ただし、デフォルトのクレデンシャルを指定する場合、コマンドラインオプションと netrc ファイルの IP アドレスが一致しないと、スクリプトはデフォルトで、デフォルトユーザクレデンシャルを使用します。手順が正常に進行しているように見えても、ログインしているマシンでは別のユーザ名が使用されるため、後から問題が生じるおそれがあります。

- マシンの各 IP アドレスには、マシンを識別するための特定の ID が付加されている必要があります。たとえば、マシン IP *address-pc* は、Prime Central コンポーネントを示します。

これは、複数のコンポーネントが同一のマシンにインストールされる可能性があり、netrc ファイルでユーザ名とパスワードを検索するときに問題が生じる場合があるためです。

次に、netrc ファイルの例を示します。

```
machine IP-address-pc
login root
password cisco123
```

```

machine IP-address-ec-os
login root
password se032c

machine IP-address-ec-sql
login root
password cisco123

machine IP-address-sv-os
login root
password smartway

machine IP-address-sv-tip
login tipadmin
password cisco123

machine IP-address-ce
login netcool
password smartway

machine IP-address-im
login root
password se032c

default
login netcool
password smartway

```

復元プロセスを完了するには、netrc ファイルで次の入力を行います。

表 2-6 復元スクリプトに対する入力

| コンポーネント                   | ユーザ      | 説明                                                                  |
|---------------------------|----------|---------------------------------------------------------------------|
| Prime Central             | root     | Prime Central VM に SSH 接続し、Oracle EE の復元を設定するために、root OS アクセスが必要です。 |
| Event Collector-OS        | root     | VM に SSH 接続し、Event Collector の復元を設定するために、root OS アクセスが必要です。         |
| Event Collector-SQL       | root     | nco_sql コマンドにアクセスするために、root Event Collector データベース ユーザが必要です。        |
| Service Visualizer-OS     | root     | VM に SSH 接続し、復元スクリプトを実行するために、root OS アクセスが必要です。                     |
| Service Visualizer        | tipadmin | Service Visualizer サーバにアクセスできるユーザ (tipadmin など) が必要です。              |
| Correlation Engine        | netcool  | Correlation Engine nci_import コマンドにアクセスできるユーザ (netcool など) が必要です。   |
| Infrastructure Monitoring | root     | VM に SSH 接続し、復元スクリプトを実行するために、root OS アクセスが必要です。                     |

## バックアップしたデータの復元

復元スクリプトは、製品 DVD から使用できます。データのバックアップが完了した後、復元スクリプトを実行するまで少なくとも 1 時間は待機してください。特定のバックアップの復元を選択すると、その時点で使用できるその他すべてのバックアップを復元に使用できなくなります。ただし、新規のバックアップ

クアップの復元を続けることはできます。デフォルトでは、復元スクリプトは、「`pc.netrc`」という名前のバックアップ スクリプトと同じディレクトリで、`netrc` ファイルを検索します。このデフォルト名と場所を無効にするには、環境変数 `PC_NETRC_FILE` を使用します。

例：

```
export PC_NETRC_FILE=/home/netcool/.netrc
```

次のスクリプトでは、IP アドレスを、`netrc` ファイルで指定した IP アドレスに置き換えます。

```
./restore.py <Prime-Central-IP> <Event-Collector-Engine-IP> <Service-Visualizer-IP>  
<Correlation-Engine-IP> <Infrastructure-Monitoring-IP> Backup-Directory
```

復元スクリプトは、5 つのコンポーネントを 1 つずつ復元します。コンポーネントが復元プロセスに失敗すると、その旨を伝えるメッセージがコンソールに表示されます。部分的なバックアップ（1 つまたは複数のコンポーネントが失敗したバックアップ）の後にデータを復元しようとする、復元スクリプトは、バックアップに成功したコンポーネントだけを復元します。



# APPENDIX **A**

## Linux のインストール：ヒントとテクニック

この章では、Linux をインストールするときに使用できるいくつかのヒントとテクニックについて説明します。特に、Prime Central for HCS に関する内容になっています。

### 新規 Linux マシンでの正確な日付の設定

新規の Linux マシンにインストールする場合は、次のヒントを参考にしてください。

- ステップ 1** カーネルでネットワーク タイム プロトコルを使用できない場合は、時刻を手動で設定します。次のコマンドを実行します。

```
date
```



**(注)** 日付が設定されていないと、登録を試みたときに認証エラーが発生します。

- ステップ 2** Red Hat に登録します。

```
rhn_register
```

- ステップ 3** yum メソッドを使用して NTP をインストールします。

```
yum install ntp
```

### ファイアウォールの永続的な無効化

- ステップ 1** root ユーザでログインします。

- ステップ 2** 次のコマンドを実行します。

```
chkconfig iptables off
```

```
chkconfig ntpd on
```

```
service iptables save
```

## Linux ファイアウォールの有効化

Prime Central for HCS インストール スクリプトによって、SELinux および LSinux ファイアウォールが自動的に無効になります。

**ステップ 1** root ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** 次のコマンドを実行します。

```
chkconfig iptables off
service iptables save
service iptables stop
```

## パスワードの変更

passwd コマンドを入力して、ログインパスワードを変更できます。このコマンドを実行すると、既存のパスワードと新規のパスワードを入力するように求められます。強力なパスワードを指定するようにしてください。正常に完了すると、コマンドは終了コード 0 で終了します。終了コード 1 は、エラーを示します。

## Red Hat ベース システムでの永続的なホスト名の変更

システムが起動すると、Red Hat ベース システムはファイル `/etc/sysconfig/network` を使用して、保存されているホスト名を読み取ります。この動作は、init スクリプト「`/etc/rc.d/rc.sysinit`」を使用して設定されます。

ホスト名を変更するには、このファイル「`/etc/sysconfig/network`」を編集し、HOSTNAME 変数を使用して適切な名前を入力します。

## コマンドラインを使用したスタティック IP アドレスの設定

**ステップ 1** root ユーザとしてログインします。

**ステップ 2** ディレクトリを `/etc/sysconfig/networking/devices` に変更します。

```
cd /etc/sysconfig/networking/devices
```

**ステップ 3** 使用可能なすべてのデバイスを表示します。次のコマンドを実行します。

```
ls
```

**ステップ 4** スタティック IP を設定し、編集する対象の NIC に対応する設定ファイルを見つけます。

```
vi ifcfg-eth0
```

**ステップ 5** ここで、設定値に従ってパラメータを設定します（編集するパラメータは、BOOTPROTO、PEERDNS、NETMASK、IPADDR、および GATEWAY です）。

```
exDEVICE=eth0 BOOTPROTO=none HWADDR=00:0C:29:DE:94:8B ONBOOT=yes
TYPE=Ethernet?USERCTL=no IPV6INIT=no PEERDNS=yes NETMASK=1.1.1.1 IPADDR=2.2.2.2
GATEWAY=3.3.3.3
```

**ステップ 6** 設定ファイルを保存し、テキスト エディタを終了します。

---

## DNS の設定

ネームサーバを設定するには、次の手順に従ってください。

---

**ステップ 1** ルート ユーザとしてログインします。コマンド `su` を使用します。

**ステップ 2** ディレクトリを `/etc` に変更します。

```
cd /etc
```

**ステップ 3** `resolv.conf` ファイルを編集します。

```
vi resolv.conf
```

ファイル形式は、次のようになります。

```
search your-dns-search-path
```

```
nameserver dns1-ip-address
```

```
nameserver dns2-ip-address
```

```
nameserver dns3-ip-address
```

一度に最大 3 つのネームサーバを定義できます。

**ステップ 4** 設定ファイルを保存し、テキスト エディタを終了します。

**ステップ 5** 変更を有効にするには、ネットワーク インターフェイスをダウンさせてから、再びアップさせる必要があります。

```
ifdown eth0
```

```
ifup eth0
```

---







## GLOSSARY

---

### A

|              |                         |
|--------------|-------------------------|
| <b>ACL</b>   | アクセス コントロール リスト         |
| <b>ACS</b>   | Access Control Server   |
| <b>API</b>   | アプリケーション プログラム インターフェイス |
| <b>AS</b>    | アプリケーション サーバ            |
| <b>ASCII</b> | 米国規格協会情報交換標準コード         |

---

### C

|                  |                                             |
|------------------|---------------------------------------------|
| <b>Cisco IOS</b> | Cisco Internetwork Operating System         |
| <b>CLI</b>       | コマンドライン インターフェイス                            |
| <b>CPU</b>       | 中央処理装置                                      |
| <b>CUOM</b>      | Cisco Unified Operations Manager            |
| <b>CUCDM</b>     | Cisco Unified Communications Domain Manager |

---

### D

|             |                      |
|-------------|----------------------|
| <b>DIMM</b> | デュアル インライン メモリ モジュール |
| <b>DRAM</b> | ダイナミック ランダム アクセス メモリ |

---

### G

|            |                     |
|------------|---------------------|
| <b>GUI</b> | グラフィカル ユーザ インターフェイス |
|------------|---------------------|

---

### H

|            |                                |
|------------|--------------------------------|
| <b>HCM</b> | Hosted Collaboration Mediation |
|------------|--------------------------------|

|              |                                    |
|--------------|------------------------------------|
| <b>HTTP</b>  | Hypertext Transfer Protocol        |
| <b>HTTPS</b> | Hypertext Transfer Protocol Secure |

---

**I**

|               |               |
|---------------|---------------|
| <b>IP</b>     | インターネット プロトコル |
| <b>IP SLA</b> | IP サービス レベル契約 |

---

**J**

|              |                      |
|--------------|----------------------|
| <b>JDK</b>   | Java Development Kit |
| <b>JTAPI</b> | Java テレフォニー API      |

---

**L**

|            |                 |
|------------|-----------------|
| <b>LAN</b> | ローカル エリア ネットワーク |
|------------|-----------------|

---

**M**

|            |                  |
|------------|------------------|
| <b>MAC</b> | メディア アクセス コントロール |
| <b>MSP</b> | 管理対象サービス プロバイダー  |

---

**N**

|              |                     |
|--------------|---------------------|
| <b>N-2-N</b> | ノード間                |
| <b>NAT</b>   | ネットワーク アドレス変換       |
| <b>NBI</b>   | ノースバウンド インターフェイス    |
| <b>NE</b>    | ネットワーク 要素           |
| <b>NIC</b>   | ネットワーク インターフェイス カード |
| <b>NMS</b>   | ネットワーク管理システム        |
| <b>NOC</b>   | ネットワーク オペレーション センター |

---

**O**

|             |                                     |
|-------------|-------------------------------------|
| <b>ODBC</b> | Open Database Connectivity          |
| <b>OS</b>   | 1. オペレーティング システム<br>2. オペレーション システム |

---

**P**

|             |                |
|-------------|----------------|
| <b>PDU</b>  | プロトコル データ ユニット |
| <b>PSTN</b> | 公衆電話交換網        |

---

**Q**

|            |        |
|------------|--------|
| <b>QoS</b> | サービス品質 |
|------------|--------|

---

**R**

|             |                          |
|-------------|--------------------------|
| <b>RAM</b>  | ランダムアクセス メモリ             |
| <b>RHEL</b> | Red Hat Enterprise Linux |
| <b>RIP</b>  | ルーティング情報プロトコル            |

---

**S**

|              |                        |
|--------------|------------------------|
| <b>SID</b>   | 共有情報 / データ モデル         |
| <b>SNMP</b>  | 簡易ネットワーク管理プロトコル        |
| <b>SQL</b>   | 構造化照会言語                |
| <b>SDRAM</b> | 同期ダイナミック ランダム アクセス メモリ |

---

**T**

|               |                           |
|---------------|---------------------------|
| <b>TCP</b>    | 伝送制御プロトコル                 |
| <b>TCP/IP</b> | 伝送制御プロトコル / インターネット プロトコル |

---

## U

**UCSM** Unified Computing System Manager

**UI** ユーザ インターフェイス

**URL** ユニフォーム リソース ロケータ

---

## V

**VLAN** バーチャル ローカル エリア ネットワーク

**VoIP** Voice over IP

---

## W

**WAN** ワイドエリア ネットワーク

**WAP** ワイヤレス アプリケーション プロトコル

---

## X

**XML** 拡張マークアップ言語



## INDEX

---

### P

サポートされている [1-1](#)

#### Prime Central for HCS

クライアント要件 [2-4](#)

サーバ要件 [2-3](#)

主要機能 [1-1](#)

デフォルト ポート [2-4](#)

ハードウェア要件 [2-2](#)

Prime Central for HCS のアンインストール [2-36](#)

---

### S

#### SSH エージェント

設定 [2-11](#)

---

### い

#### インストール

Prime Central for HCS [2-10](#)

インストール後の手順 [2-33](#)

前提条件 [2-5](#)

ハードウェア要件 [2-2](#)

リモートでステージングしたファイルの使用 [2-11](#)

ローカルでステージングしたファイルのターゲット マシンでの使用 [2-17](#)

---

### て

データのバックアップと復元 [2-37](#)

---

### と

ドメイン マネージャ



©2008 Cisco Systems, Inc. All rights reserved.

Cisco、Cisco Systems、およびCisco Systems ロゴは、Cisco Systems, Inc. またはその関連会社の米国およびその他の一定の国における登録商標または商標です。本書類またはウェブサイトに掲載されているその他の商標はそれぞれの権利者の財産です。

「パートナー」または「partner」という用語の使用はCiscoと他社との間のパートナーシップ関係を意味するものではありません。(0809R)

この資料の記載内容は2008年10月現在のものです。

この資料に記載された仕様は予告なく変更する場合があります。



シスコシステムズ合同会社

〒107-6227 東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー

<http://www.cisco.com/jp>

お問い合わせ先: シスコ コンタクトセンター

0120-092-255(フリーコール、携帯・PHS含む)

電話受付時間: 平日 10:00~12:00、13:00~17:00

<http://www.cisco.com/jp/go/contactcenter/>